
猫耳姫巫女と聖なる槍の担ぎ手と

三歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫耳姫巫女と聖なる槍の担ぎ手と

【Nコード】

N6260Y

【作者名】

三步

【あらすじ】

写しの世界…今いる世界と対となるもう一つの世界は魔法文明が発達した世界だった。主人公の月影光太は”つきかげこうた写しの世界の自分”に向けられた（勢いがつき過ぎた？）聖なる槍に貫かれ写しの世界へと引き込まれてしまい…。そこで彼は猫耳の少女ミルと出会い世界を救う（かもしれない）行動に出る…。
ライトでチートな異世界トリップ物語…愛を感じたい方にささげる作品です。

プロローグ（前書き）

開いて頂き感謝・感謝です！

ブローグ

「眠い…」

目を手の甲でこすりながら朝の街並みを歩いていく。

勤めている会社に出勤するため最寄駅に向かっている。

因みに就職して2年目だが今年、うちの会社は新規採用を取らなかったのもまた下っ端だ…朝も少し早目に行って色々と用意しないとチクチク上司に嫌味を言われる。

バーガーを右手に、ドリンクを左手に持って食べながらテクテク歩いていく。

眠いのは夕べやり過ぎてしまったから…新作ゲームを。

タイトルは「転生勇者vs異世界トリップ勇者」だ。

説明書には「初心者には転生勇者の方が扱いやすい」と書いてあったので迷うことなく異世界トリップ勇者の方を選んだ…。

はい、ヒネくれてます（笑）。

そんなこんなで歩いていると、

ピシッと変な音がした…。

周りの景色がストップした…。

目の前の空間にヒビ(?)が入って割れた…。

はい？

中から、美女が飛び出してきて
抱きついてきました…。

ラッキー？「グサ！」

え？

この女性…背中に何かはえている…。

異空間（？）の方から伸びている物…槍の柄？

三又の槍が女性の背中に刺さっている…。
あれ？…俺にも…刺さっている？

急に引っ張られた…。

槍の柄が元の空間に引っ込んで行く…。

どうもこの槍の穂先…”返し”がついているみたい。

だから…、つまり…、暗いその空間に自分も引き込まれる…ってわけだ。

やっぱし…夕べは…転生勇者を選べばよかったかな？意識が遠のいていくのを感じながら俺、月影光太は…そんなことを考えていた。

ブログ（後書き）

更新は毎日朝7時00分の予定です。長めでノンビリ書いて行きます…。

眠い空間のなかでの対面（1）（前書き）

感謝・感謝です！

眠い空間のなかでの対面（1）

眠い…ひたすら眠い…。

気持ちがいいというか…ひたすら眠い…。

（…おい、……………か？）

ぼうつとしている意識に何者かが語りかけてくる…うるさい。

（新聞も宗教も間に合ってるよ。）

（？…新聞はともかく、…そっちの世界は宗教を押し売りするのかい？）

（ああ、こないだ駅のホームでイキナリ祈らせてくれて。迷惑だ

よ…。。。）

ゴッドプレス

（祝福を無料で？かなりいい話じゃない？）

（言い訳ないじゃん。別に宗教に文句つけてるんじゃないよ、イキナリ声かけられたらびっくりしするんだよって話し…、てっ！誰？）

眠い目をやつのことで開くとすぐ目の前に美女がいた。

今の状態は抱き合っているといって良い。

北欧系の人種かな？白に近い金髪に灰色の瞳、見つめていると吸い込まれそうな気になる。抱き合っているので、つまり密接しているのでよくわかる、スタイルは抜群だ。

（アイ キャンノット スピーク イングリッシュ！）

（イングなんとかがしゃべれない？…なんだ？）

目の前の美女がしゃべった。

日本語で？なんか口の動きと言葉が違う様な気がする。

（日本語しゃべれるのか？）

（？…そっちの言葉かい？全然ムリムリ！）

お手上げのポーズをしてきた。

なんかこのポーズは美女には似合わないな。

（これは推測だけどね、声が頭に直接聴こえる気がするんだ。この空間の特徴か、あるいはコレと一緒に貫かれてる影響か…。なんにしるコミュニケーション取れるのは便利だよな。）

そうだよな、異世界に行つてまず、始めにぶつかる困難は会話や言語…つまり意思の疎通が難しいってことだ。

タベもゲームでそれをなんとかするイベント「言語理解の魔法を手に入れる」をやったつけ。メツチャご都合主義なイベントだよな。

あれ？異世界？

眠い空間のなかでの対面（2）（前書き）

感謝・感謝です！

眠い空間のなかでの対面(2)

ゲームや小説でよくある話だけど、現実にとちよつと焦るな。

(えーと、ココドコ？ワタシダレ？)

(それだと記憶喪失から目を覚ましたばかりの人っぽいんだけど
(笑))

(お約束に突っ込んでくれてありがとう。で、ドコ？ダレ？)

(今度は思いつきり短くしたなあ(笑)。さすがオレの「写し」なだけある)

(「写し」？)

(簡単に言つと、オレの世界と対となるもう一つの世界、「写しの世界」があるらしいんだ。そこにはもうひとりの俺が、「写しの俺」がいるみたいなんだよ。つまりそれが君だと思つよ！)

(わからないことが多いけど…なんで俺が？ていうか男言葉似合わないねキミ。)

(ソロソロ消えるよ…この姿。)

見ていると、顔が変わっていく。

触れ合っている柔らかい女性の体が、固い筋肉質の体になつて行くのが感じられる。

やがて男性…服装はそのままだけど…になつた。

(俺そっくり！)

(変身の術さ…。な！そっくりだろ…だからそうだと思つよ。)

(うん、キミの言う「写し」って説明は理解出来た…体感的にはなんかすつごく損した気分だけど…今までの姿は？)

(惚れた女の姿だよ…影武者つてのをやっててね…彼女の身代わりに聖なる槍の攻撃を受けたってわけさ。)

（そうか…男だね！エライぞ俺！）

（オレだオレ！お前じゃないだろ…。まあ…、オレじゃこのくらいがせいぜいなんだよ…。）

（その言い方、なんか身に覚えがある…まさか彼女には彼氏がいるのか…俺意外に。）

（だからお前じゃないだろ…。まあ、向こうはオレのこと最高の友達って言ってくれてたしなあ。）

（必殺・生殺し！だね。）

（くっ、さすがにオレの写し！グサつときた…でも俺の写しなら同じ様な経験あるんだろ？）

（グサつときた！返された！さすが俺の写しだぜ！）

なんか恋の話で盛り上がってしまった。異世界の話はどこいったんだろ？

眠い空間のなかでの対面(3)(前書き)

感謝・感謝です！

眠い空間のなかでの対面(3)

(まあ、話を戻そう。ダレ？はもういいや。どこ？の話をしてくれる。)

自分と抱き合ってるって…正直変。

周りを見渡すと、今いるのは直径10mくらいの光る球体の中みたいだ。

外がつつすら透けて見えるけど様子はよくわからない。

(まあ、槍から散々逃げ回ったからどこにいるのかよくわからん。

…因みにこの球体は「聖なる槍の結界」だと思う。この中で封印されて一生を過ごすのさ。)

(…今さらりとすごいことイワナカタ？封印？出られない？ハッ！俺がこうなった理由がまだわかんないままだった！)

(この状況で案外平気だなあ、たぶん…槍の力が強過ぎたんじゃないかな？…大魔王クラスを封印する力を俺みたいないなペーパーに使用だから…だから写しの世界にまで影響を…。まあ、この辺は俺も全然わかんないから推測だけだな。)

(そうか…つまり…全てはこの槍を使ったやつのおかげか！)

(そこで、オレを恨まないところがオレの写しだよな。「ザ・責任は他人にあり」思考！)

(くっつ、責任者出てこいー！ってくるわけないか。)

(（グスン…ゴメンなさい（泣））)

あれ？なにか女の子の声が聞こえたような。

魔法を使ってみよう！(1)(前書き)

感謝・感謝です！

毎回そうですが、かなり悪ノリ・ライトで行きます。

魔法を使ってみよう！（1）

（何か聞こえなかった？）

（？…いや、なにも聞こえなかったぜ。）

空耳かな？

（まあいいや。それより、このカッコどうにかならないかな？…そういえば、刺されてるのに痛くないや？そっちは？）

（こっちも痛くはない…。俺も又聞きだからよく知らないけど、伝説の神器”聖なる槍”には「魔破」の力と「封印」の力があると聞いている。その槍が俺に向かってシユビビーンと飛んで向かってきってから必死で逃げただけどずーっと追いかけてきてな。ついに刺された！と思ったらお前に会って、その後、この球体が現れてさ。痛みはないけど、なんか力が抜けてやたら眠たいんだなこれが…。）

聖なる槍の封印の効果なのか？

自分のほうも眠気は覚めない。

（もしかして寝たら封印中ずっと起きなくて眠り姫状態か…。苦しくないのはいいけどやだなあ。）

（じゃあ、眠くならないように、暇つぶしにそっちの世界のこと教えろよ。）

（その前に質問！さっきの「変身の術」って魔法？）

（当たり前だろ？…まさかそっちの世界にはないのか？）

（ピンポンその通り！なあ俺、魔法を使えないかな？ワクワク！）

（うーん…、カード魔法ならすぐ使えるかもな…？やってみる？）

（マジ！やるやる！なんでもやる！）

なんか今残念な状態だけど楽しめることは楽しもう！
魔法力モン！

魔法を使ってみよう！(2)(前書き)

感謝・感謝です！

魔法を使ってみよう！（2）

ジャジャーン！

ということと魔法を使ってみることになった！
できるかな？

（封印の効果で使えないかもしれないけどな。）

そう伝えてきてからカードを3枚出してきた。

（好きなを選びな。）

そう言って渡されたカードには

「霧？」、「手」、「オーロラ？」の絵が描いてあった。

（精霊属性の「霧化」と、ノーマル属性の「触診」と、光（聖）属性の「聖幕」のカードだ。光（聖）属性のカードはお前がオレと同じ闇（魔）属性だと心ポケット入れられないし、使えないけどな。）

（心ポケット？）

（まあやって見たほうが早い。どれか選んで心のなかに、胸の奥底に入れて願ってみな。）

まあやってみよう。

心に入っておくれよカードさん…お気楽過ぎかな？
おっと、すっかりどれか選ばないで願ってしまった。
が、手から全部のカードがふっと消えた！

（なんだって！全部入ったあ！？）

まだ魔法使っていないけど…案外すごいらしいな、オレ！

魔法を使ってみよう！(3)(前書き)

ストックがたまりましたので、今日と明日は0時と12時の2本をアップします。

魔法を使ってみよう！（3）

魔法カードが全部俺のなかに入ったのをみて異世界のオレがびっくりしている。面白いな、自分がびっくりしてるの見るって。

（ビックリドッキリだね！…でもいくつかわかったよ。まず、心ポケットが3つ以上…普通1つだからこれはすごい！）

もしかしてチート？

（ふたつ目は、光（聖）属性のカードが入ったから、属性が闇（魔）ではないこと。ちなみにこれは入るか？）

もう一枚渡された、これには「黒い球」が描いてある。闇（魔）属性のカードのようだ。

もう一度同じように念じるがカードはそのままだった。念のため1枚出して念じたが、ダメだったので返した。

（光（聖）属性決定だな。ちなみに属性は、無しがノーマル系、地火風水などの精霊系、そして光（聖）系と闇（魔）系ってのがある。）

光と闇は反発しているので逆の属性カードは心ポケットに入れられないとのこと…この辺り細かいルールがあるらしい。

（あと、”魔法が使える魔力がある”ってことだ。そもそもそれが足りないと心ポケットに入らない。3枚分だから…少なくとも初級の魔法使いよりは多いな。）

まあ、その辺はいいや。ともかく使ってみてみたい！

（どれ使おうかな？「霧化」使ったら霧になれる？槍から抜けられるかな？）

（まあやってみ。使うことを強く念じればいいけど、始めのうちは声に出したほうがいい。）

日本語でいいかな？

「霧になれ！」

一瞬自分の姿が細かい粒子になる感触があつたけど…それが消された感触も感じた。

（やはり、聖なる槍に邪魔されてるっぽいな。）

（じゃあ、「聖幕」は？なんか同じ「聖」だしかるんじやない？）

（かもしれないがやめてくれ！闇（魔）属性の俺には辛い！結構強力なレアカードなんだぜ？）

（自分が使えないのになんで持ってるんだい？ていうか、そんなん渡すなよ。）

（何かの交渉に使えるかなって…前に神殿に潜り込んだ時に拝借しといたんだよ。それに俺の写しだから闇（魔）属性だと思ったから、その確認用。）

（ふーん、じゃあ「触診」は？）

（手で触ったものの情報を引き出せるカードだ。…聖なる槍を触らなければいけないんじゃないか？）

そつか、なら改めて！

「触診！」

触る対象は自分の身体…ってうわ！

（どうだ？頭のなかに情報が浮かんできただろ。自分が一番わかり

やすい形で情報化されるはずだ。）

（ゲームのステータス画面だ！…わかりやすい！）

自分のステータスを見る。…あれ？

心ポケットの数のところ、解析不能ってでてる。

（なあ、どうだ？）

（…うーん、色々と数値が出てるけど、多いのか少ないのかわからないなあ。）

（ならオレ触ってみる。比べてみな。）

そうしよう。手を楽な位置、抱き合っている相手の背中に添えるがコッソンと何かに当たった…ああ槍が刺さってたっけ。

あなたは世界を救いますか？はい・いいえ（1）（前書き）

感謝・感謝です！

あなたは世界を救いますか？はい・いいえ（1）

「触診」のカード魔法で自分のステータスを確認して、こっちの世界のオレと比べようと手をオレの背中に回したら、誤まって刺さっている槍に触ってしまった。

・ ・
6 0
5 9
5 8
5 7
・ ・

「触診」の効果は、聖なる槍に弾かれてかき消されと思っていたが…。

そんなことはなく、聖なる槍の情報が浮かんできた。

長さは6 m、重さは1 k g…軽いな。穂先の形状は三又と…。

減っていく数字が見えるんだけど。これって、…カウントダウン？

（槍の情報が見えるよ。）

（本当か？どんな様子だ？）

（なんか、カウントダウンしてるんだけど。）

（カウントダウン？何の？）

（さあ？）

（気合を入れればもっとよくわかるぜ？やってみな。）

じゃあやってみよう。

槍を握りその中を深く染み入るように感じてみる。
すると…3Dの画面が出てきた。

（…なんだあ？中に女の子がいる？しかも猫耳！）

（（私が見えるの！））

（うん、…猫耳さん何してんの？）

（（時間がないの！お願い手伝って！））

（イキナリ…なにが起こっているの？）

（（この槍の力が暴走寸前なの！））

（…このカウントダウンもしかして？）

（（そう！世界が滅亡するくらいの力なの。こちらの世界が無くなれば、あなたのいた写しの世界もなくなるわ！））

…すごいことが起こるのがあと1分くらいみたい。
どうする？

あなたは世界を救いますか？はい・いいえ（1）（後書き）

あなたなら、あと1分で世界が滅亡するくらいのならなにをしたい
ですか？

私なら好きな人と手をつないでいたいですね。

あなたは世界を救いますか？はい・いいえ（2）（前書き）

感謝・感謝です！

あなたは世界を救いますか？はい・いいえ（2）

どうしよう？

考えているうちにも…カウントダウンがどんどん進んでいく。

・

4
6

4
5

4
4

・

取り合えずなにを求められたか確認しよう。

（なにをすればいいんだ！）

（おーい、もしかして槍と…）

（（受け止めて！この力を！あなたにしかできないの！））

（できるのか？絶対？確実に？）

（（絶対とは言い切れないけど…））

（やるよ。その代わり何かよこせよ！）

（（何を？））

（なんでもいいよ。報酬があるほうが燃えるじゃん！）

（（え？え？え？））

（時間ないんだろ。早く始めろよ。どうすればいい？）

（心を開いて…何でも来いって思っで！）

（アバウトだな、OK何でもこい！）

もう一人のオレよ、俺は世界を救うぜ！）

（…勝手に話してたな。わけわからん。まあ、面白そうだから好きにしる！）

そして、急に胸の奥底が熱くなった。

身体が発光している！

グッ…俺カッコいい…かも！

カッコつけたど…グッ…苦しい！

ヤッパリ…やめれば…よかった。

シャレに…なんない…。

グッ…あ…あ…あ…！

大魔王シェリー

大魔王シェリーが語ります。

東の空の山々がくつきりと浮かび上がってきた。月明かりしかない夜は、闇を見通す力を持つものが多い魔族に有利な時間だ。しかしもうすぐ終わる。夜があけると同時に、人間側の攻勢が強くなるはずだ。

魔軍を率いる彼女…大魔王シェリーは宙に浮かびながらそう判断をした。ならば…夜が明けるその前にもう一撃。

彼女は魔力を抽出して手のひらに集める。物理的な衝撃と精神的な衝撃を相手に与える闇玉を打ち出す。闇玉は前方下方にいる人間の軍勢に近づくに連れて分裂し雨のように降り注ぐ。軽く数えても数千の人間の上に降り注いだはずだ。爆発で視界が塞がれていたが、しばらくすると…無傷の人間たちが見える。

またかとウンザリする…人間の歌声が聞こえる…闇の魔力を打ち消す「聖歌」の魔法。地上の部隊が苦戦している最大の理由がこれだ…。ある一定以上の人数が歌わないと効果がないという。そのため、断続的な攻撃を続け疲弊させたり、分断しようとしたりしたが、今のところうまく防がれている。

空中戦ができる戦力はこっちが圧倒しているがあの魔法があるせいで攻めあぐねている。こう着状態と言って良い。

（シェリー！あっち！）

”影”からの警告を受けてそちらを向くと、こちらの戦力を粉砕しながら一直線に近づいてくる一団が見えた。見慣れぬ白い法衣を身に付けたその者達から感じる”力”は今まで相手にした者達には感じなかったものを感じた。

「ふふ、ファイガード王国はアンノルフアイ教の戦闘賢者どもを借

り受けたか。面白い！相手になつてやる！」

女神アンノルファイを主神とするファイガード王国はアンノルファイ教と親密な関係を保っている。アンノルファイ教は国政に積極的に干渉しないが協力を惜しまないところがある。為政者には扱いやすい宗教と言えるだろう。最もそういう姿勢で王国に取り入っているから栄えている宗教ともいえるだろう。その辺は彼女にはどうでも良いことだったが。アンノルファイ教の聖職者の中で戦闘賢者は一騎当千の実力を持っていると言われる。

一団から一騎：ペガサスに乗った者が近づいてきた。周りの者がその進行を邪魔させないようにしているあたり、自分に当ててくる最大戦力なのだろう。近づいてきた者を見ると白銀の鎧を身につけた女戦士と猫耳の少女だ。女戦士の方には見覚えがある。もう一人は見覚えがなかったが、猫耳なのは女神アンノルファイに愛でられている者の証、侮れば痛い目を見るのはこちらだ。

「久しいな！サーラ王女！この前は楽しませてもらったぞ！必死に逃げて行った姿は滑稽だったぞ！はははは！今日も楽しませてくれ！」

「大魔王シェリー！今日こそは：お前の見納めだ！」

サーラの言い回しに引かかるものを感じた。何度倒されても向かってきては高飛車な口上を繰り返していた彼女にしては勢いがない……含みを感じる。

「ミル：頼む。」

「はい！お姉様、ご武運を！」

そう言うのと両手を組んで祈りを捧げるかのように頭を下げた。

「姫巫女の名において：召喚”聖なる槍”！その大いなる力を貸し与えたまえ……。我を入柱に！」

そう歌うように言葉を紡ぐと少女は光り輝き三つ又の槍になった。信じられないような光（聖）属性の力を感じる！シェリーは生まれて以来、始めて恐怖を覚えた。

サーラが槍をこちらに突き出すと槍から光が溢れ出しこちらに向か

ってくる。

とつさに光（聖）属性に強い対抗力を持つカード魔法”闇幕”を張ったがあっさりと貫かれた。

「ぐう！」

あまりの力に身体が傾く…。思った以上に効いた。

「イキナリ真打ちとはな！」

サーラの持つ槍の先に今度は紅い光が灯った。

（やな予感！）

”影”がそういうや否や”影”が”シェリー”に、”シェリー”が

”影”に位置と姿を変える。

その途端、紅い光が”シェリー”の身体に巻きついた。

「これで決して外れない！」聖なる槍”よ！大魔王を封印せよ！」

サーラが槍を投げ出す！

”シェリー”が”影”を切り離して逃げる。

すぐに”シェリー”を追いかけようとしたが想像以上のダメージを受けているようだ…身体がうまく動かない…くうっ力が抜けていく…。

”影”…マーフイーよ、もしお前が封印されても必ず助け出すぞ…！
シェリーの意識は…闇の中に消えていった。

大魔王シェリー（後書き）

もう一人のオレの名はマーフィーです。

ここまでは俺、オレといいあう場面設定のために今まで名前を伏せてきました。

世界を救った代償（１）（前書き）

すいません。かなり短いです。

なので今日も０時と１２時の２回アップします。

以後、元の７時に戻します。

世界を救った代償（１）

何だか…眠い…なあ…あれ？

額にひやりとしたものを感じて俺は眼を開けてみる…。

と、目の前に女の子の顔がアップで見えた。

見覚えがある…耳をみると猫の耳をしていた。やはり槍の中にいた女の子だ。

濡れタオルを額においてくれたらしい。

「????????」

想定していたので驚かないが言葉の意味がわからない。

女の子が何かを言うと言つと笑顔を作った…耳が垂れる。

猫耳がかわいい。

オレンジ色の髪の毛をした女の子は１０歳位か…２４歳の俺にとつては守備範囲外だな。

だがあの耳はポイント高い！

触ってみたい！

本能的欲求に逆らえなかったので、上体を起こして手を伸ばしたが…手がない？

そんなことはなく、服の中に収まっていただけのようだ。袖をめくって手を出す…あれ？

手が小さい。目の前の女の子の手と比べても大差はなかった。

身体をみると、足も靴が脱げズボンに隠れている…。

間違いない…身体が小さくなっている。

世界を救った代償（2）

どうやら、身体が小さくなってしまったらしい。

年齢で言くと10歳前後か…若返った？

まあ、転生名物の羞恥プレイ（オムツ替え）を受けるまでにならなかったからよしとしよう。

気持ちを落ち着かせようとして周りを見回す。天気はいい、どこかの池のほとりにいるようだ。匂いが自然の匂いだ。都会育ちの自分には違いがよくわかる。

もう一つ目に入ってきたモノがあつたが…そちらは無視した。

「あれからどうなったんだろ？もう一人の俺は大丈夫かな？」

そうつぶやくと自分の影が伸びて膨らんだ。

人の形を取ると…もう一人の”オレ”になった。

もう一人のオレは軽く俺に触ると頭に声が聞こえてきた。

（言葉通じないだろ。「触話」のカード渡すからと使ってみな。）

そう言くと手を離れた。その手にカードが現れる。

握手している絵が描かれている。

そのカードを手に取り心ポケットにいれてみる。

それから、もう一人のオレの手に触れた。

（あー、あー、テスト、テスト、テスト、ただいまマイクのテスト中…聞こえる？）

（…こつちの住人にわからないギャグはやめるよ…最後気弱になつたろ。）

（心からすまみませんえん。…ごめん。ほんつとくにゴメンなさい。）

（…一瞬、本当に俺の写しかと悲しくなつたぜ。）

（真面目をやるう。俺は月影光太、”こうた”でいいよ。）

（オレはマーフィーだ、コータ。）

（じゃあ、まず教えてくれる？マーフィーとこの子に色々聞きたい

んだけどその前にマーフィーに聞きたい。この子は知ってる？)

(ああ、戦争相手だ…。そこら辺は3人で話した方がいい。)

女の子の方を見ると、察がいいのか手を出してきている…。その手を握った。

(聞こえる？)

(はい…聞こえます。)

(名前教えてくれる？俺は月影光太、”こうた”でいいよ)

(はい、私はミルフィユです。みんなからはミルって呼ばれてます。コータ…様。)

少し震えている…手も…頭に響いてくる声も。

今、右手でマーフィーと、左手でミルと手を繋いでいるかたちだ。

(今のミルの声、マーフィーにも聞こえる？)

(聞こえるぜ。こういう会話は始めてだな、面白い。)

俺はを仲介しての情報交換会が始まった。

世界を救った代償（3）

今、俺はが「触話」のカードを心ポケットに入れて魔法をかけ、俺の写しのマーフィーと猫耳のミルに触れることで会話が成立している。

（では、…ミルに聞く。さっきの空間で俺とマーフィーが話していたのは聞こえてたんだよな。）

（はい、…聖なる槍は感応鉱物オリハルコンでできているので、心がつながると会話ができるんです。）

（その辺はあとでいいよ。今までの経緯を俺に話してくれないか？俺こつちの世界のこと知らないからわかりやすくね。）

（はい、では、私の素性から。私はファイガードという王国の第2王女です。）

今、私たちの国と大魔王シェリー率いる魔軍とは戦争をしている状態なのです。大魔王シェリーはあまりにも強く最後の手段として私達は”聖なる槍”を召喚することに決めました。

この槍の召喚し扱うには王家の血を引く姫巫女と呼ばれる者が人柱になることが必要で…つまり…それが私です。）

少し苦しそうな顔をした。…ムカツ！こんな小さな女の子を人柱にして…聖なる槍だあ？…。いきなり刺されたもんで聖なるモノなんて全然思っちゃいなかったが…。

（人柱になった私が入った”聖なる槍”が見事、大魔王を貫き封印しようとしたときです…槍は、この人が大魔王でないことを見抜きました。）

ミルはマーフィーの方をみた。マーフィーは肩を竦めて呟いた。

（影武者が俺の仕事だったからね。）

（…見事に欺かれたとしかいえません。）

悔しそうな顔をして、また俺の方を向いた。

（ともかく、槍は中にいた私に非常事態を伝えてきました。封印対象の力が弱すぎてバランスが取れず、強すぎる封印の力がこのままでは暴走してしまうと。…緊急事態を回避する方法を槍は示してくれました。…次元を超えて、今貫いている者の「写し」を貫き、その者に暴走する力を流し込むことを。それは槍には容易いことだと。私は急いで確認しました、その者の命には問題はないかと。槍は問題ないと伝えてきました。）

ちと疑問が…その質問では命さえ無事なら…ってことになんないか？

（本当に申し訳なかったのですが、その…あの…サクツと刺しました。）

（プククツ…ストレートだな。）

（笑うとこじやないぞ！）

（はい、…笑い事ではありませんでした。暴走しようとする力を必死になって制御して、コータ様に注いでいたです。ですが…）

ミイはまたマーフイーをみて

（また、問題が起きました。コータ様の心ポケットにカードを入れた影響で力がコータ様に入らなくなってしまったのです。）

れれれ？

俺がカード魔法使ったせい？でも不可抗力だし、勝手に俺の中にド

クドク力を注ぎ混んでいたみたいだし…俺が悪く思う必要ないよな？

（しばらくは、力を暴走させないようにするので精一杯でした。そこにコータ様から声がかかったので…。）

（んん？それなら俺に魔法のカードを外すようにいえばよかったんじゃない？）

（ダメです。槍が言うには、力の入り口がポケットに変わってしまったと。カードを外してももう戻らないから無駄だと。…それで、また…槍が…。）

（何て言って来たんだい？）

（本人の許可があれば他に入り口が作れると…強引にですけど。）

（…で、あのお願いだったわけね？）

（本当に申し訳ありません！色々ご迷惑をかけて…）

（それもあと！ちなみに俺がなぜ子供になったのかわかる？）

（それは暴走した力のせいです。あの槍は過去と現在と未来の時間をつなぎ合わせて無限の閉鎖された時間の輪を作り封印となすのです。色々と暴走しまくったせいで、過去が強くなっていた…というのが私の槍の中での最後の記憶です。私もあの後気を失ってしまつて…気がつくとコータ様と一緒にここにいました。その後、”聖なる槍”がどうなったかもわかりません。）

うーん、やっぱりそうか…ワカンないんだ…。

（マーフィーもどうなったか知らない？）

（槍か？知らんよ。なんかの力がコータに集まってくる代わりに封印が解けたのがわかったからコータの影になって隠れたんだよ。槍は元のところに戻ったんじゃない？召喚系の武器みたいだし？）

むう、コッチもトボけているわけではないらしい…。

…いじにあるのに。

世界を救った報酬

ここまでで大まかなことはわかった。

ああ、大事なことを…一応確認しとこう。

（でさあ、俺、元の世界にもどれる？元の身体に戻る？）

マーフィーもミルも困った顔をしている。答えを知らないのだろう。

（まあ、そのうち見つかるだろ…。あつそうだミル！）

（ひゃい！）

すごい…滝のような汗を流しながらこっちをみている。このあと俺がなにを言うかわかっているのだろう。

（世界って救われた？）

（…ハイ。）

滝の汗が加速する。

（世界は救った…その代償として元の世界に戻れそうにないし、身体も小っちゃくなった…。で、あのときに話した報酬だけど）

ミルがこっくと大きく頷いて、

（…な、なにを望めますか？）

（こいつと報酬の約束！さすがオレの写し！しっかりしてるぜ。オレは何にしようかな？）

（マーフィーの茶々は置いといて…）

（ブーブー！独り占めするきか！…でもそれもオレらしい…。）

これは無視。結構真面目な場面なんだよ。

（あるとき君は報酬を払う約束はしていないよな。それに俺、なんでもいっていったから。

君は報酬を払わなくてもいいし、あるいは報酬が「感謝の言葉」でもいいんだぜ。

…ミルは何をくれるかな？くれないかな？）

震えながらもミルははつきり言った。

（私の願いを聞いてくれて…世界を救ってもらったんです。払います、払わせてください！私が払えるものなら何でも…。）

ミルは濁流のように汗を流しながらも、こっちを向いてしつかり答えた。

うん、…応えてくれた。

（じゃあ、報酬としてその猫耳触らせて！さっきから触りたくてうずうずしてたんだ！）

（えっ？…いいですけど、それだけですか？）

ふふふ！OKがでた以上遠慮は無用！早速さわりまくった。

ミルはくすぐったそうな顔をしている。

（…さすがオレの写し…読めなかった…）

右手は離していなかったのでマーフイーとはまだ「触話」中である。ミルは俺の膝のうえに頭を乗つけて気持ちそうにしている…すると、そのまま寝てしまった。安心して力尽きたのだろう。

（こんな小さな女の子を人柱にして…恥ずかしくないのか。）
（それだけ、大魔王が強すぎて対抗する手段がないってことだろ。
追い込んだ側ではあるが同情するぜ。）

魔族（？）つばくないことをマーフィー言った。

…さて、疲れがまたでたのか力が抜けて来た。上体を元に戻して、
横になった…右手は離していない。あと一つやることがある。

（マーフィー…ミルを殺さないでくれ。）

（…さすがオレの写し、よくわかったな。）

（ミルはマーフィーにとって不都合なことを知りすぎているからね。
俺が敵の立場なら同情なんてしない…。）

（…保留だな、とりあえずコータの身の安全が保証されるまで。…

封印に失敗している彼女は…戻れば危うい立場だぞ、王家はお前にも
ミルにも敵にまわる可能性が高い。）

（…俺も向こうでは…人柱だったんだ。）

意識が遠のいていく…もう限界だ。

（ふっ、3人とも…か）

マーフィーが何かいったがもうコータの耳には入らなかった…。

世界を救った報酬（後書き）

最初の方に本文で描きましたが、本編の主人公はかなりひねくれています。

今後、ひねくれ度が増すかどうか…見守っていただけるとありがたいです。

コータの異世界メモと… 5年後の大魔王（前書き）

前半は設定集的なものです。

コータの異世界メモと… 5年後の大魔王

<コータの異世界メモ>より抜粋

世界について

お互いに影響し合う2つの世界がある

俺のいた世界は、こちらの世界の人は「写しの世界」という
便宜上俺はこちらの世界を「異世界」ということにする

「写し」の世界にもう一人の自分がいることをこちらの世界は知
っている

ただし、なぜ、写しの世界を知ることができたのかは不明
(ミルは知らない、マーフィーは気にしたことがない)

「写しの世界の自分」は性格は一緒だが、魔法属性は反対
(自分たちしか知らないので推測)

単位について

時間、重さ、長さは、元の世界と同じ

地理

円系の大地

時計に照らし合わせてみると、

魔軍側が12時から6時まで

人間側が7時から11時まで

中央の山脈には竜が住まう(不可侵)

国家と宗教と大地・勢力範囲について

人間側

女神アンノルファイ(猫耳)を主神とする王国ファイガード(7、
8時の大地)

国王はスカルクはミルの父親

男神ハウカッター（犬耳）を主神とする帝国カタカタ（10、11時の大地）

自由都市国家群ビクチャイルド

帝国と王国の間にある（9時の大地）

魔軍側

魔王5国家がある

大魔王シェリー（3、4の大地）

1魔王（2時の大地）

2魔王（12、1時の大地）

3魔王（5、6時の大地）

4魔王

マーフィー

マーフィーは魔王になりたて（本人曰くペーペー）

マーフィーの領地（国）はシェリーが管理している
シェリーの”影武者”をしているためらしい

マーフィーはこれ以上教えられないという

ちなみにこれはミルには知らせていない

言語

王国：コネ語

帝国：ヌーイ語

主に自由都市：共通語

魔軍：暗黒共通語

魔法について

色々と種類があるらしい

魔力を消費することで発動する

「カード魔法」はその中でも特殊な存在らしい

「カード魔法」は心ポケットにカードを入れて使う

心ポケットに入れば使えるし、発動に時間がかからないので便利
ただし、使用できる（消費できる）魔力がないと心ポケットに入れ
ること自体ができない

ミルとマーフィーの知る限り2枚以上入れることができた者はいない
（この情報は秘匿する必要があるかもしれない）

魔法には4つの属性がある

扱う者にも属性がある

^{ノーマル}無、精霊、光（聖）、闇（魔）

光（聖）と闇（魔）は反発する

戦争

12時の針の位置で帝国と2魔王とが戦争中

7時の針の位置で王国と3魔王・大魔王連合軍とが戦争中

最大のポイント

女神アンノルフアイ（猫耳）に愛でられた者は猫耳に、男神ハウカ
ッター（犬耳）に愛でられた者は犬耳になる！

犬耳みたい！

コポコポ…

薄暗い空間の中、水が管の中を流れる音だけが響く…。

そこには直径3m程のガラスのようなものでできた球体が台座に設
置されており中は薄い朱色の液体で満たされている。

管が二本接続されており一方から新しい液体が入る音、もう一方か
ら液体が出る音、この空間の音の源はそれだけ…。

その中には美しい女性が入っていた…白に近い金髪に灰色の瞳をし
ている。

この女性の瞼は薄く開いているが、夢でも見ているのか…意識は存在していないようにみえる…。

球体の前にはその女性をじっと見つめる男が佇んでいた。その指には怪しく光る指輪がはめられている…球体の中の女性も同じものをしている。

ギギギ…と重い音がして、男の背後にある大きな扉が開き…何かが入って来て男の後ろで止まった。

「首尾は？」

男は振り返ることもなく問う。

「はっ、例の副官を倒してまいりました。」

「王国の方は条件を飲んだか？」

「想定通り…6の大地を渡すことで停戦協定が成立しました…」

「…ならば、当面の対応は他の魔王達となるか。」

「時間稼ぎの方は抜かりなく行っておりまする…。」

「5年はことを構えないように…任せたぞ…。」

「仰せのままに…それでは失礼いたします…5年後の大魔王様。」

それが、背後の扉を閉めて出て行ったあとも…男は飽きることなくじっとその女性を見つめていた…。

魔法を使ってみよう！2

「ニヤッ、ニヤッ！」

今日は俺がこちらの世界に来てから3日目になる。

今はカード魔法を練習しているところだ。

先ほどから、ミルは小石を持った手をいつでも投げられるように構えながフェイントをかけてきている…この投げられる小石を防御するのがこの訓練のテーマだ。一瞬で、反射的に、展開するのだ。

「ニヤッ！」

（聖幕！）

投げられたその小石を一瞬で弾く！

「いいニヤッ！」

ミルは戦闘中にはなぜか語尾にニヤッ！が付く。

ちなみに「いい」の部分はさっき教えてもらったばかり…言葉の壁は結構感じるが、「触話」のカード魔法のおかげでコミュニケーションに不足はない。

「次いくニヤッ！」

「おう！」

また、聖幕の魔法を解いてまた構える。

24歳から10歳くらいになった俺の身体能力的なハンディは大きい。まずは、防御を覚えるようにマーフィーに指示された。

これは「写し」である俺が死ぬことがあればマーフィーも死んでしまうから必然である。今のところ俺はマーフィーのアキレス腱なのである。

ちなみに今いるところは7時の大地の中央山脈よりのようで王国内にいるようである。もう使われていないらしい山小屋を借りている。ミルの説明では「聖幕」の魔法カードはかなり高い防御能力を秘めているらしい。子供の頭くらいの大きさの石を投げつけられても平気だった。

ミルは小石を持った手を震わせて投げるフェイントをかけてきて…逆の手でパンチを見舞ってきた。速い！見えなかった！聖幕は3発入ったことを伝えてきた。同じくらいの年に見えるのにミルはどうやら強いらしい…俺弱すぎだよ。

だが、「聖幕」の魔法カードは本当に強力だ！今のパンチも中にはダメージを与えていない。

「ならば、こうニヤッ！」

消えた！ミルの速さに全くついていけない…背中に攻撃を食らった…。両手の指の先が輝いている…それでひっかかれたらしい…が、効かないぜ。

「クッ！これならどうニヤッ…！」

また消えた！が今度は影がチラリと自分の身体にかかったのを見逃さない、上だ！

ドリルクローアアタック
「回転爪突進！」

ミルが頭上から回転しながら突っ込んでくる！いいだろう！バトラーの血が燃えてきたぜ！ゲームだけどね…。

聖幕の衝突予想地点の摩擦抵抗を弱めてふんわり受け止める、そのまま摩擦抵抗を高めて聖幕をミルの身体に触れさせ巻き取らせることで回転を止める。

「受け止められた?!」

ちなみにこの辺のミルの言葉は俺の勝手な解釈です…。

ともかく、今度はコッチの番！一気に幕をピンと張る！

「きや！」

弾き飛ばされて悲鳴をあげるものの猫のような身のこなしで着地する。

「フシュー！フシュー！」

…これって興奮した猫みたい（笑）。説得は無理だな…あっそうか言葉通じないんだっけ。

まあいい！やってやろう！某拳闘マンガ直伝！…読んだただけけど…フリッカージャブ…！

聖幕の一部を拳にみたててミルに繰り出す。

パパンと音がして…ミルが倒れた。

…あれ？…やり過ぎた？

「ミル！」

近寄って揺り動かすが目覚めない…頬が赤い、どうも目を回しているらしい。

とにかく濡れタオルでも用意しよう！少し離れた気の枝にタオルをかけて置いたのを取る…。れれ？

聖幕の一部がタオルをつかんで…タオルが宙を浮いてきたように見える。

聖幕はこちらの意思に反応するらしい。

試しにナイフをイメージして枝を切ってみた。

ずしゃーんと…木が倒れた。幹まで切ってしまったらしい…。

「聖幕は防御の魔法で…ない？」

結構使える…これ！

…はっ、ミルのほっぺ冷やさなきゃだった！

コータが元の世界のことを話さない理由（前書き）

ちょっと長いです。

コータが元の世界のことを話さない理由

訓練のあと、近くにある池のほとりで俺とミルは2人して休息を取ることにした。マーフィーはいない。マーフィーは俺達の食料を確保した後、戦争の状況を確認しに行っている。そのときに1つお使いを頼んだが、状況によってはそれが許されないかもしれない。俺は聖幕を使ってタオルを池の水に漬けてから絞りミルに渡した。ようするに「おしぼり」だ。

「（聖幕のカードでこんなことができるなんて知りませんでした…。）」

ミルは言葉を発生しながら、つないだ片手から「触話」による会話を同時にしてもらっている。

聖幕は本当に便利で防御だけでなく攻撃にも使える。それに使ってみると案外細かい作業もできることがわかった。

（何で今まで気づけなかったんだろ？）

俺にはまだ会話は難しいので「触話」で言葉を伝える。

「（多分、消費魔力の多さだと思っ…ちょっとかしてくれます？）」

心ポケットからカードを出してミルに渡した。

ミルも光（聖）属性らしい。

「（聖幕！）」

ミルが聖幕を使うと、ちょっとピンクがかかった幕が見えた。コ―

タの聖幕は無色…色の違いは性格が影響しているかもしれないと推測する。

「（１、２、３、…限界！）」

ミルの魔力では３秒しか持たないらしい。ミルは険しい顔でカードをみながらカードを返してくれた。

「（私も王族ですので、子供でもそれなりに多い方なのですが…コータ様は魔力が桁外れに多いようですね。これでは防御しか考えつかないのではないのでしょうか？、それに結構レアなカードと聞いていますし。）」

なるほど、消費魔力が多過ぎて使用時間が短いし、数が少ないので説明が進んでいないということか。

（ありがとう。それよりミル、敬語やめろよ。おんなじ子供なんだし。）」

ちょっと笑いながらそう言うと、ミルも笑って言い返してきた。

「（ですが、…コータ様は２４歳ですよ。あつ、槍の解析機能で勝手に情報が頭に入ってきてたんです。）」

年齢を正確に知られていた。一体どこまで情報が漏れたのか？怖くなるな。

（それでも王女様だろ、もっと俺にえらくそうにしてもいいんだぜ。）」

そう言うと、ミルは急に真剣な顔になって俺の目を見つめてきた。
ミルは年齢的に守備範囲外ではあるが猫耳だし可愛い。

「（コータ様の世界にも…王様とかいるのですか？）」

（俺のいた国は王政は崩壊しているけど、いないわけでもない。まあ、一応全員身分は平等ってことになっているよ、そういう国がこっちにもあるって聞いたけど？）

「（自由都市国家群のなかにあると聞いたことがあります…。）」

ん？なんか別のことを気にしているっぽいな？

（俺の世界のこと、知りたい？）

「（あの…コータ様があまり向こうのことを話されないので…私を氣遣ってくれているのですか？向こうに未練とかおありでしょうに…。）」

ちょっと目が潤んでいる…どうやら俺が氣を使っていると勘違いしているらしい。確かにミルからすれば俺は巻き込まれたかたちになり、ミルが張本人と言えるだろう。この辺り俺の解釈は少し違うが…これはしっかり話しておいた方がいいだろう。

（ミルに氣を使っているわけじゃないよ。向こうに未練はないよ。）

未練とか全然ないといえば嘘になるが、…この子には嘘をつきたい。

「（ごめんなさい…。）」

ミルの目からポロポロと涙がこぼれる。うーん、仕方が無い…話すとするか。

（ミルには感謝している。）

「（へ？）」

（こちらの世界に連れてきてくれてありがとう。…少し俺のこと聞いてもらえるか？）

ミルが泣きながらこくと頷いた。

俺、月影光太は普通の家生まれた。裕福とは言えなかったが、兄弟も多いし賑やかな家族だったと思う。それが10歳のときに引越してから変わってしまった。父の兄が子供を残さず亡くなつてしまい、父が実家を継ぐことになったため実家に引っ越したのだ。

元々父は継ぐ気がなかったし、父の両親も若い頃から父を自由にさせていたらしい。それが継ぐことが決まってから格式を重んじる祖父母に色々言われまくったらしい、兄に比べて要領が悪いとかなんとか…。それで父は家にあまり帰ってこなくなった…。そんな父の代わりに祖父母の矛先は母に向かった。母は一生懸命堪えてやってきたけど、とうとう身体を壊してしまった。母は母の実家に帰って病氣療養することになったのだが、男子は連れていけないように祖父母に求められた。俺と3歳の弟に残るようにと。このとき離婚も絡んで色々あったらしいが…。

俺はみんなが幸せになれる方法を考えた。祖父母と、母は少しの間は離れていた方がいい、そうすればまたみんなで楽しく暮らしたくなるはずだと。弟はママラブ真っ最中だ、だから俺は皆に自分が残るといった。そして祖父母のいうことをなんでも聞く代わり弟を連れていくことを認めさせた。

俺の俺なりに考えた末の言動であつたが俺は甘かつたらしい。結局、母は兄弟は実家に帰ってこなかった…。いつになつても…。

それでもいつかもと通りになると頑張つた…。祖父母のいう通りの学校に行き、成績もそれなりにいい、優等生をしていた。

祖父母は満足してくれていたし、俺の説得もあつて父との和解も進

んでいた。もう少しでまた皆で暮らせると思った。そんなとき…、大学に入ってしまったら祖父が急に亡くなった。ショックだったのか祖母はその後一気に痴呆が進んで施設にはいることになった…何も解決しないまま…父と母と兄弟は戻ってきた。

みんながごめんよと、もうお前だけに苦労はさせないといってくれた。嬉しかったし、俺の行動はみんなを幸せにしたと思った。

やっと家族一緒になったが、本当に苦しかったのはここからだ…。心が一緒に生活することを拒んでしまったのだ。

いつも俺の心には、今までなぜ助けられなかったのかという思いが渦巻いている…。笑いあっているはずの家族の笑顔を見ると嫌になった…。精神科医にきくと精神的なストレスから心が疲れ果てているのだと。俺が作り上げた幸福な家族…その幸福な家族という存在が一番俺を苦しめるのだと…。

結局、俺は大学を卒業したあと一人暮らしをはじめた。

（だから、元の世界に帰ることは俺にとって苦しみしか生み出さない。せつかくだし、ここで1から始めてみようと思うんだ。）

10歳の子供相手に話す内容ではなかったかもしれないが、ミルはずっと真剣に聞いていてくれた。なぜか心が軽くなるのが感じられた。

「（まるで人柱…。）」

（ミルに比べればそんなたいしたもんでもないよ。）

俺は最近気がついたことがある。俺は家族の愛を今ではなく過去にこそ受けたかったのだと、同じ愛でも、ときが…必要なときがあるのだと。

こちらに来てやることのない俺は心のなかでひとつ決めたことがある。

ミルを元の状態に戻すことを。

ミルは…まだ間に合う。

ミルから聞く分には、みんながミルを大切に思っているらしい。

「（私…力になります…なるよ…コータ。）」

何かを心に決めたようにミルがタメ口を聞いてくれた。

（ありがと、でもミルは小さいから無理なことしないでいいぜ。）

「（背は私の方が大きいわよ…ふふ。）」

軽口を叩ける相手が…冗談を言い合える仲間が、どうも俺にも見つかったようだ。

帰ってきたらもう一人の俺に”ダチ”を紹介してやろう。

契約：魔王マーフィーが久しぶりに笑った日（1）

マーフィーが語ります。

早朝の冷えた空気のなかをオレは飛んでいた。魔力を使いながらも、「魔法」に頼らず何かを行使する能力…スキルと呼ばれるものがある。飛翔のスキルは魔人として生を受けたマーフィーが生まれつき持ったスキルである。

しかし、今日は違和感を感じるほど制御が難しかった。心が乱れている…。早くもう一人の俺、コータの無事を確認したかった…。それでも抜かりなく後を追うものがないか確認しながら、もしいたとしても方向を掴ませないように大きく回り込んで飛んで来た。おそらく大丈夫だろう。

コータ達のいる山小屋を見つけ近くで降りる。一応警戒をしながら接近する。すると、扉が空いてコータが出て来た。手を振っている。こちらに気がついていようだ。

「おかえ…る。」

「おかえり、だろ。」

流石に10日程度では会話は無理か。

だが、それよりも気にかかることがある。コータの雰囲気が変わっていた。そして何故オレが帰って来たことに気がついたのか。

「触話…前…触診…してくれなさい…。」

「触話で会話する前に触診でコータを確認しろってことだな。」

コータは笑いながら頷いた。

俺の警戒する心を読んだらしい。オレはカード魔法「触診」を心ポ

ケットに入れてから、もう一人の俺である「写し」のコータの身体に手を触れた。ステータスを確認する。

子供のため、身体的ステータスは情けないほどに低い…敏捷度がちよつとだけアップしていたが。身体も、精神もステータスは異常を示していない。誰かに操られたりしてはいないようだ。
ん？

「カード魔法の聖幕が発動中？」

コータが足元を指で指した。魔力を見ることのできる力を持つオレはコータの足首に輪のように巻きついて無色透明な聖幕を感じた。そしてそこから数本の糸のようなものが出ている…幕の一部を糸のように細くしているという事か？。これをあちらこちらに張つてあるから…近づく者に気づくことができるというわけか。なんという器用さだ！

とりあえず確認ができたので手をつなぐ。

（あー、恥ずかしいな発音のミスって…。）

（コータ、…雰囲気が変わったな。それに聖幕のこれはミルに教わつたのか？）

（まあ、心のモヤモヤがすっきりしてな…聖幕の応用については後で話すよ。それよりマーフィーは…俺の軽口に付き合えないくらい余裕がないな。）

確かに今のオレに余裕などない。途方に暮れていると言った方がいい…。

（最悪の想定を上回ったって感じだな、…この場合は下回ると言うべきか？）

（どっちでもいいが、…凶星だよ。）

（話してくれ…。もう一人のオレがそこまで心配する事を。）

契約：魔王マーフィーが久しぶりに笑った日（2）（前書き）

この作品をみて頂いただけでなく、評価をつけてくださった方がいました。

本当にありがとうございます。

作者は幸せ者です。

今回の話は（3）まであり、マーフィーを幸せにしたいなと思ってます。

魔族の幸せって…難しいですね。

契約：魔王マーフィーが久しぶりに笑った日（2）

引き続きマーフィーが語ります。

何がそうさせたのか…今のコータが大きく見える…力では仮にも魔王である自分に叶うべきもないはずだが、こいつとは戦いたくないと思った。

（まず、状況報告だ。あの日、魔王が封印されたという話が敵味方に伝わり魔軍は崩壊。翌日に停戦の申し立てを3魔王が王国側に打診し、王国もそれを受けてその翌々日には停戦合意に至った。）

ここまでは自分の予想を超えていない。

（そして各状況だが、王国は6の大地を譲渡されたらしい。本当はお金を巻き上げたかったようだが上手くかわされたようだ…。しかも魔軍のモンスターの敗走経路は5の大地に向けたものではなく7の大地に向けてだ。これは意図的にだろう。王国は6の大地の管理についてと、国内に侵入されたモンスターなどを相手にしばらくは戦争どころではないだろう。王都で勝利の凱旋パレードくらいはしていたが。）

（魔軍のほうは？）

（コッチは様子がおかしい。シェリーがいないんだ。魔王王は行方不明となっている。確かに聖なる槍が封印したことを誰もみていないだろうが。）

（うーん、マーフィーが大魔王の影武者であることを事を知っている人物は少ないってたよな？）

（オレとシェリーを除くと2人、3魔王のキャンプと、大魔王の副官テスだけだ…。）

コータは少し考え込んだ…。そして

（聖なる槍の攻撃でシェリーが死んだ可能性は？）

（ないな、確かに大ダメージを受けてはいたが致死ではないはずだ。）

（シェリーが何かされたとしたら、2人のうちどちらを疑う？）

（テスはこのケースでは傷付いた大魔王を回収し安全の確保、オレが時間を稼ぐってことになっていた…。3魔王のキャンプは…シェリーの恋人だ…。どちらも今どこにいるかわからない。まあ、疑うなら…。）

心のなかでそれを言うのは嫉妬のせいだとストップがかかる。

（大魔王シェリーはキャンプのところだな。1人で身を隠しているという選択肢もあるが…）

（あいつはやられたらやり返すぞ。たとえ瀕死の傷を負わされたとしても隠れたりはしない！それにキャンプにやられるほどヤワじゃない！）

（なら…、キャンプに一杯食わされたんだろ。彼女は相当深いダメージを負っていたみたいだし…副官は葬られたんだろうな、多分。）

コータは何故、ここまでではっきり言えるのか？俺のその疑問に…言葉には出していないのにまるで聞いていたかの様に…コータは答えた。

（停戦が4日で合意？アツサリ6の大地を譲渡？明らかに用意してましたって感じだな。これは王国側にも内通者がいるな…。もしかしたら聖なる槍の召喚自体…用意されたものなのかもしれない。）
（なんだって！）

（上手くすれば大魔王を、失敗しても”影武者”の魔王マーフイーを封印できると踏んだんじゃないか？）

（だが、やつはシェリーに惚れている。失いたくないはずだ。）

（封印だ、死ぬわけでない。それに今も殺さずに幽閉しているに違いない。）

（全てお前の推測だろう…：こちらのことをよく知らないから知っている範囲で答えを出そうとしている…：危険だ。）

コータは触話のために握っている手に力をいれて来た。

契約…魔王マーフィーが久しぶりに笑った日(3)

引き続きマーフィーが語ります。

コータは握っている手に力をいれて来て…俺が思っても見なかった事を言い出した。

(…もしマーフィーがこの世界で大きな事をやれるとしたら、どんなことをしてみたい?)

(なんだよ急に…まあ、俺も魔王のはしくれだし、世界征服くらいはしたいと思う。)

(…ちっちゃ!)

(な…ちっちゃ! ってなんだよ!)

(俺ならば、恒久平和くらいは言うぜ!)

(ふん! 人間らしいと言うか…お前の世界はそうなのか? お前はそれのやり方を知っているとでも言うのか!)

(俺の世界だってそんなもんじゃないよ。それに、そんな世界の作り方があったらいらない、…そんな既製品いらないよ。)

(なら…)

(なあマーフィー! お前に俺の異世界の知識を全部くれてやるよ。その代わりにお前の全てを俺にukれないか?)

こいつはオレが…オレが考えていたセリフを言いやがった。

(何がお前をそこまでさせる? させる気になった!)

(ミルを元の場所に戻してやりたいんだ…家族の元に。ただそうなると成り行きでその位を目標にした方がいいと思ってね…だから世界征服くらいはサクツと行こうぜ。)

このとき…この言葉が頭から背筋を貫いて足先まで痺れさせた。
…そうだ、この感触…思い出した…これがオレだ！オレの真の姿だ！
…久しく忘れていた…。

コータよ、まさしくお前はオレの「写し」だ！

（ならお前も…魔王を名乗れよ…オレの「写し」だろ！）

（やだよ…イロイロ被りそうじゃん！…他になんかいいのない？）

（確かに…大魔王含めると5人も魔王いるしな…うーん、いつその
こと神でも名乗るか？）

（俺、宗教苦手なんだよ！…まあもう少し後にしよう、それ考える
の。）

（そうだな、何もしてないのにそんなこといってもしようがないよ
な…はははははははは！）

心から笑ったのはいつ以来か？久しぶりに…体が勝手に踊り出した
くなるほど愉快になった。

これからコータはもっとオレを愉快にさせてくれるだろう。

オレもコータを楽しませなければ！

そうでなければ…置いていかれそうだな。

契約…魔王マーフィーが久しぶりに笑った日(3)(後書き)

うーん…大きいこと書いた(汗)。

これからフォローが大変そう(泣)。

作者はウツカリ八兵衛の転生者なので、変なところがありましたらご指摘くださいね。

突入！ファイガード城（１）

停戦から１０日程すぎた頃、王都ファイガードの様子は沈静化しつつも、大魔王シェリーの封印と停戦に湧いた歓喜の空気と、人柱となったミルフィーユ姫を失ったことを悲しむ空気が混在していた。また、モンスターなどが多く国内に入った事もあり国民に大きな安心感はない。

夜８時をすぎた頃、王城近くにたたずむ３人の人影があつた。その内２人は子供なのかもう一人に比べるとかなり身体が小さく感じる。

「…うん、今からがいいと思う。」

「…そうだな、これ以上待ってもしょうがないだろ。」

背の高い男と、女の子が同時に声をあげた。これは真ん中に立っている男の子が「触話」の魔法カードを使って２人に同時に言葉を投げたために起こった事ではたからみると奇妙に見えた。

一瞬、３人で見つめあつて笑い合う。

男の子が女の子の方を向いた。

「…うん、頑張るわ！」

男の子から何かメッセージを受けとったのか女の子は小さなガッツポーズを作った。

「よし、じゃあ入れ！しっかり用意してくれよ、悲劇のプリンセス様。」

背の大きな男が両手を広げた。すると２人の子供の姿が掻き消えた…。

「派手に行くか…。」

そう言うと、その男の姿は闇夜に消えてしまった…。

突入！ファイガード城（2）

ミル（ミルフィーユ）が語ります。

「ふははははははは！あーはっはっはっは！」

マーフィーがあげた笑い声が王城内にこだまする。ここは王城の中、私がよく知っている場所なの。

私の話から入りやすいところをとってお城のなかに入るとマーフィーはワザと姿を見せたの、大魔王シェリーの格好で！

そして目的の謁見の間まで向っている真っ最中。この時間、謁見の間の近くで王様はお父様は仕事をしている事が多い。それに何かあったらそこに兵を引き連れて防御に当たると聞いた事があったからの。

「まっ魔王だ！大魔王シェリーだ！」

「衛兵！集まれー！うあああっ！」

マーフィーが黒い何かをあちこちに打ちまくっている。

（火炎系のほうが見栄えがするんだがなあ…ダメか？）

「（ヤメテー！）」

思わず声を出して叫んでしまった。

（却下だ！もっと手加減しろ！死人を出したら元も子もないんだからな！）

（めんどー…。）

今、私とコータはマーフィーのなかにいる。マーフィーの持つ「影懐」という特殊スキルが作り出した空間？にいるのだけど、あんまり気持ち良くないの、ココ。でもマーフィーの視覚を通して周りを見る事ができるのはとっても便利ね。

マーフィーの攻撃で自分の見知った場所が吹き飛ぶのを悲しい思いで見届ける…うん、…全て私のためなのだから。

（この先、約50人、強いのがいる、力、魔力、色々だ！）

コータは本当にすごい！「聖幕」と「触診」のカード魔法を同時に使って感知系の魔法を作り上げた。「センサータッチ」と言っていたが驚く程遠くのものまで情報をつかむ事ができた…この人には驚かされてばかりだな…コータといると胸がワクワクする。

コータは世界を救ったというのに全く報酬を求めてこなかった…私が子供だったからかしら？

それだけじゃない！私を家族の元へ戻すためにこんな危険な事もしてくる。感謝しきれない存在だ…とても魔王の「写し」とは思えない。

（団体さんか！どうする！必殺技使うか？）

（GOだ！必殺技使え！時間がかかりすぎた！）

（2人とも必殺技って言うのヤメテー！）

やっぱりコータは魔王の写しでした（泣）。そう…私が”必殺技”なの！

（出すぞ！）

マーフィーの中から出された私の体を、マーフィーは左手から植物

のツタのようなものを出して絡め十字架に張り付けられた様な状態にする。

「攻撃したければやってみろ！ミルフィーユ王女が死ぬ事になるがな！ウワハハハハハハ！」

「ミルフィーユ姫！生きておられたか！」

「姫巫女様！」

「な、なんということを！」

「姫を盾に！」

「人でなしめ！」

「オニ！アクマ！」

私が盾にされたので皆が攻撃をためらう。マーフィーはその間に彼らの頭上を飛び越した。

因みに、通り過ぎるときにいくつか攻撃がマーフィーに向いたが全てがコータの聖幕に防がれる。今、聖幕はコータのイメージ（？）というもので黒く染まっている。「闇幕」という「聖幕」と対をなす闇（魔）属性の防御魔法を偽装しているって。

（ヤッパリこれだぜ、魔王っばくてキモチー！よしっ！あそこの大扉だな！突っ込むぜ！）

（バカ！まだ中を感知出来て…）

コータの突っ込み発言が言い終わる前に中に謁見の間に突入してしまった…。

かなり多くの人がいた、…手や武器を輝かせた人達が。その人達が一斉にこちらを向いた！私に向けて魔術を放とうとしていたの！ひやー！

（やべー！）

(ミルを中へ！)
「打てー！」

私がマーフィーの中に引っ込んだ瞬間、爆風に空間が揺れた。冷や汗がだくだく流れる。

「ダイジョーベ」

まだあまりしゃべれないコータは、多分「大丈夫」と言おうとしたのかな？コータの両手が…聖幕の起点でいった…忙しく点滅している。一応、かなりの攻撃に耐えられると聞いていたけれど…怖かったの…コータをみて安心成分を補給！うん、もう大丈夫！

(ミルとの訓練のおかげで、反射スピードが上がってよかった。いくら「聖幕」が2枚あっても展開に時間がかかるし、タイミングが難しいんだ。)

コータはマーフィーに色々なカード魔法を集めてもらっている。その中にもう1枚「聖幕」があり、コータは心ポケットに2枚「聖幕」を入れている。これを1枚づつ連続で貼り続けることで、途切れることのない防御を行うって言うてたの。

「小石投げつけの訓練」のことを褒めてくれたのは私を励ますためにいつてくれたのかしら？

攻撃が一旦止んだ…どよめきがその場を支配する。

「そんな！」

「あれを食らって…やはり本物なのか？」

「化け物め！」

(マジでビビった…)

（マーフィー！必殺技を出して余裕の顔！ミル…ここからだぞ！）

だから必殺技いうのヤメテー！

でもコータのいうとおりここからが本番！

茶番が始まる…私とコータの人生を決める茶番なの！

突入！ファイガード城（2）（後書き）

マーフィー：俺の人生は？

ミル：コータに含まれてるけど？

コータ：マーフィーのものは俺のもの、俺のもの俺のもの。

マーフィー：くう！さすがは…オレの写し！

ミル：じゃあ、ミルの人生もコータのものだから、コータの人生もマーフィーの人生もミルのものなのニヤ！

2人：負けた…。

この罪は誰のもの？

ミルが語ります。

「なかなかの歓迎ありがとう！危うく土産をふいにするところだったがな！」

磔にされた私をよく見える様にするためか、マーフィーが作ったらしい小さな光の玉が頭の上に浮かんだ。

「ミル！あつ！生きていたのね！」

王妃…お母様が飛び出しそうになって周りの者に抑えられる。自然と嬉し涙が出てきた。

「お母様ー！」

「改めて名乗ろう！シェリーだ！国王はいるかな？」

「ここだ！大魔王！」

大勢の中から一人の男が歩み出した。見るからに王様という格好ではあるけど…

（あれはグレン叔父様よ。）

（本物はどこ？）

（…よくわからない、見える範囲にいないみたい…。）

（それはないな！マーフィー！いぶり出せ！）

私を戒めるマーフィーのツタの様なものがいばらに変わったの！い

ったーい！小さく悲鳴をあげてしまった…。

「影武者に用はない。いないなら土産は持ち帰るとするか？それともここで…」

「やめて！娘の代わりに私を！」

「…よせ！娘を離せ！」

前に出ようとするお母様を制し、グレン叔父様の近くにいた若い兵士が叔父様の前に立った。その姿が変わり王の…私の知っているお父様の姿になった。

…ここからコータの考えたみんなに罪の意識を植えつけちゃうよ作戦が始まった。

「娘を人質に、何を要求するつもりだ。」

「人質？聖なる槍の人柱として生贄に捧げられたこの娘に、そんな価値が残っているのか？」

大魔王シェリーの女性ではあるがよく通る力強い声があたりに響くと一斉に静かになったの。誰も声をださない…もしそうしたら自分に罪がのしかかってくると思っているのだろうか？…出せないみたい。

「人柱にしたからこそだ！その子には生きる価値がある。」

「封印に失敗してここに無様な姿を晒しているのだぞ…それでもか？」

「その子には何も罪はない！あるとすれば人柱を命じた私にこそある！」

まるでこの場にお父様と大魔王しかいないかの様に静かだった…。お父様と大魔王の視線が真正面からぶつかり合っている。

（まだだ、もう少し時間を稼げ！）

コータと私は今、ある作業をしている…。この芝居をすることだけでも私はイッパイイッパイなのに、コータは…私のためにさらにあることをしているの。

「王よ、お前に罪があると言ったな？ 本当にお前だけか？」

そこでシェリーはゆっくりと周りを見回した…多くの者が目をそむける。

「違うであろう…この娘を人柱として生贄に捧げたのはお前たち全員であるう？ 違うと言える者がいるのか？ 命がけでこの娘を人柱にすることを阻止しようとした者がいるか？」

静かで、重い空気がこの場を支配している…うん、私の番なの！

「みんな反対してくれました！ 私は、私は誰にも強要されていません！ 私が自分で手を上げたの！ だから誰も悪くないの！ くうっつ！」

マーフィーがまた締め付けを強くした、ホントにイタタタタタ！

「健気だな…小娘。自分を見捨てた者達をかばうなど…お前がこの者達を恨んでも誰も文句は言わないぞ…一言くらい言ってやれ…一緒に封印されてくれる人はいませんでしたか？ ってな～！ うははははははははは！」

話し方がオヤジっぽい…偽物ってばれないかな？ そんなことをマーフィーがしゃべってる間に私とコータは作業を進めていく。

（よしっ、もういいぞ！ファイナーレだ！）

「というわけで…、この娘はお前たちの罪の証明、罪そのものだ！王よ、一つ試練を与えよう…この娘を私が生きて返せばお前たちはこの娘が生きている限り罪を忘れることがきまい…それに耐えられるか？耐えられなければ今、私が代わりに命を奪ってあげよう…どうだ？」

「人間を舐めるな！娘の命を奪うというなら刺し違えても貴様を倒す！」

一気に場内に戦いの緊張感が膨れ上がったの。私も冷や汗がダクダクなの…。

「…その言葉試してみようぞ。」

マーフィーがゆっくりと私を…お父様の方へ…いばらで宙吊りのまま…お父様の目の前で…はらりと戒めが解かれた。

「ミルー！」

「お母様！うあああああん！」

直ぐにお母様が抱きしめてくれた！人垣が幾重にも巻かれマーフィーの姿はもう見えない。

因みにここからはひたすらなくように言われているの…コータに言われたから…でも、芝居の必要はなかったの！

お母様の香りが、私の知っているお母様の温もりが、二度と触れ合うことのないと思っていた暖かさに…心から泣いたの…。

魔王のはかりごと

あれから3日。王都は活気がみなぎっていた…王女ミルフィーユが生還したことを国民は祝福してくれたのである。

数日後には帰還を祝ってお祭りを催すという…ミルフィーユが国民に愛されていたのか、王の統治が国民に認められているのか、街中でも封印失敗の否定的な発言を聞かない。

今、俺はカフェで人待ちである…来ないかもしれないが。ふっと影が重たくなる…マーフイーが戻ってきたのだろう。

（どうだった？）

（ちゃんとミルはお城にいたぜ…それにもうすぐ来る。）

洒落ていて居心地の良いカフェは、以前行ったヨーロッパの店に近い。日本のカフェよりも少しオープンでレトロな雰囲気だ。

そこに一人の男性が入ってきた。カウンター席にいるコータの方へまっすぐ向かってくる。

「????????」

おそらく、隣いいか？とでも言ったのだろう。日本人特有（？）の曖昧な笑みで誤魔化し、右横の席を手のひらでさして「どうぞ」と意思を伝える。

男性はウェイターに何かを注文してから座った。

カウンター席なので自然と自分の右手と、男性の左手のが触れ合う。これでカード魔法の「触話」が使える。

（コータ…君じゃな？）

（はい、王様。来てくれてありがとうございます。）

顔は覚えている、謁見の間でみたから…ミルの父親で王様である。
正直来ないか使いの者が来ると思ったが…よかった。

（礼には及ばんよ。話は全てミルから聞いた。…娘をありがとう。）
（きつと忙しいですよ、まずこれを…。）

1枚のメモを渡した。

（ミルが言っていた不穏分子のリストだな。3魔王とのつながりの
ありそうな…）

そう、謁見の間でセンサータッチを駆使してあの場にいる全員の様
子を探ったのだ、動きがおかしいものを俺が示し、ミルに名前の確
認をとってから後でマーフイーには文字にしてもらったものだ。大
魔王とミルが現れたのは恐らく3魔王と通じている者にとって衝撃
的だったろう、ステータスの精神面にかんりの変動が見られた…。
これもミルのため…ミルのためにも憂^{うれい}を残すつもりはない…。

（ミルは元どおりの生活に戻れますか？）

（全く同じというわけにはいかないが…皆が優しくしてくれて…大
切に思っているから大丈夫じゃ。）

なんとなく口ごもってるあたり…大丈夫かな？

でももうこれ以上ミルにして上げられることはない…あとは家族
に任せよう、うん。

（では、これで。）

（まっ、待て！それだけか？ここに呼んだのはなぜ？）

（あんまり意味はないんです…ミルのことを大切にしてくれるなら

ここまで来てくれるかなって…試してみたいでごめんなさい。）

王様だけ呼び出したのは…ミルの顔をみたら別れを言えなくなるかもしれないから。

（コータは…お前はここを去るつもりか？）

（マーフィーもシェリーのことを気にしているし…）

（ミルの気持ちは？）

うーん、ミルの父親にこんなと言われるって思わなかったな…逆に「娘に近づくな」くらい言われると思ったのに…。

（ミルを幸せにしてやってください…）

席を立つて手を話す瞬間…触話の効果で言葉が飛び込んで来た。

（やにや！逃がさないのにや！）

ビクツとして席の男性を…王を見ると…服だけ残して姿が消えた…上で音がする。聖幕でガードすると天井を蹴って勢いをつけたミルが降って来た！爪攻撃で物凄い衝撃を受ける！

「ミル！」

（マーフィー！何故？城にいるんじゃないのか？）

（ケツケツケツ…いたよ、王様に化けてこっちに向かったのをみたけどな。嘘は言っていないぜ。）

（この裏切り者…！）

（コータは裏切り者なのにやー！）

聖幕越しにミルの思念が聞こえた。こんなことなら先に「触診」で

ステータスを確認すればよかった。

（ついでにこいつらも連れて来たぜー！）

コータの影、つまりマーフィーから王様と王妃、あと姉妹兄弟か？
が飛び出して来た。

「（王様バカ！王様バカ！王様バカ！
どこの世界に魔王のなかにロイヤルファミリーまるごと入れてお城
を抜ける奴がいるかー！）」
「?????????!」

俺のツツコミに…意味は通じてないはずだが…王様は胸を張って答
えた。

（くくくつ、娘のデート現場をのぞくためなら魔王だろうとこき使
ってやる！だそうだ…負けたな？）

うわっ！なんか物凄い敗北感…てなこと言い合いしながら聖幕でミ
ルをあしらっていたら、店の周りに物凄い人垣ができて来てしまっ
た！ミルの名を連呼している。

（さすがは姫巫女！ここまでとは！）

?…姫巫女って…たしかミルのこと？

（姫巫女がどうしたってんだ？）

（この国で姫巫女ミルフィーユっていえば国王より人気がある国民
的美少女だと…噂でしか聞いたことがなかったんだが。）

なんだってー！ミルは国民的アイドルだったのか！

王様が周りのみんなに何かを話しかけた…するとみんな笑顔で…手をワキワキさせながらにじり寄って来た…こっ怖え！

（なんて言っただ？）

（ミルの恩人が恥ずかしがって逃げようとするから捕まえるの手伝ってくれて…褒美もだすってさ。）

くそっ、こうなったら聖幕をフルに使って…

「（盗札！）」

影からマーフィーの手が伸びて来て胸を探られた！

（「聖幕」は2枚とも預かつとくぜ…これを逃げ切れたら拍手してやるよ！）

（こっ、オニー！アクマー！俺の写しー！）

（ケツケツケツ…キモチー！）

くっ、謀ったな！

仕方が無い！他のカードはまだあんまり使ったことがないが全力を出せば…

…その後、あっさり捕まって王城に連行されました…マル

魔王のはかりごと（後書き）

どうですか？

ライトな感じを楽しんでもらえたら嬉しいです（笑）

裏設定ですが、ミルは国民的アイドルだったので、あんな芝居をしなくても普通に帰って来ても歓迎されたのです…。

あの芝居がプラスに働いたのはコータとマーフィーに対してです。

ここまでが導入の物語と作者はとらえております、どうだったでしょうか？

これから先もノンビリでライトでチートな話を紡ぐつもりです、お付き合いしてくだされば幸いです。

ミルの心配と新しい仲間（１）

ミルが語ります。

カタンコトン…馬車の音が、揺れがミルの心をブルーにするの…。
ため息をつきながら馬車の窓から外を眺める。

「うふふ、ミルはまたコータさんのことを考えているのね。」

隣に座った母…王女メリッサが言葉をかけてきた。お母様も私と同じオレンジ色の髪と猫耳をしているのでよく似ていると言われる…猫耳は女神アンノルフアイに愛でられた者の証なの。

今は神殿のお勤めを終えた帰り道。

今日のように２人してアンノルフアイ教団の神殿に赴いて神官としてお務めするのはしばらく間があいていた…ミルはここ１年は聖なる槍を召喚する特訓のために神殿に泊まり込んで修行をしていた…なので久しぶりのお母様との仕事に幸せを感じていたの。

でも終わった途端、早く帰りたくて仕方が無い衝動に駆られたの…コータの近くにいないと…不安で不安で…。

「まだ、この間のことを気にしているのね。あれは彼を１人にしたこちらのミスよ…コータさんを責めるべきでは…。」

「わかってるの！でも…。」

先日、王女ミルフィューユこと私の生還パーティーが催されたとき、コータも皆に紹介されたの。

コータは「私の帰還のために力を貸してくれた写しの世界の無力な少年」ということにした。そして褒美として私の父の従兄にあたるグレン叔父様の非保護者になった。つまり事実上の養子…グレン叔

父様には今子供がいらない…になることになったの。これによりコータの身分は保証されたものになるはずだったのに…。

「いっぺんに20人も婚約するなんて…、コータのバカ。」

「まともに会話もできない10歳の男の子に婚約の話振る大人が悪いのよ。お父様もその件は無効だと正式に公表してくれたからいいじゃない。」

実は「触話」の魔法カードが使い過ぎて破れてしまい会話がうまくできなくなっているの！

なんとかなるとコータがいうので出席させたけど、叔父様の養子ってことは公爵の爵位を譲られる可能性もあるから…。

まだこちらのしきたりを知らないコータは宴席で多くの人と会う約束をしたみたい。

そのときに相手が娘を紹介すると言ったのをコータはそれほどたいしたことではないと思ったみたい…親が自分の娘を紹介し、コータが会う事を承諾した時点で婚約が成立することに全く気付いていなかったの！知らないからしょうがないかもしれないけれど…！

後でそれに気がついたグレン叔父様は頭を抱えてしまった…この国の法律上では違法ではなかったの。

コータはみんなの前では強がって笑っていたけど自室でかなり凹んでいた。

さらにその後のウワサが最悪なの！コータは頭がユルくて誰にでも結婚してくれっていう男の子というウワサが流れたの！！お陰で下働きのメイドなどもあることに言質を取ろうとしてコータに迫るって目にもあっているの、もう…！！

「そう言えば、お父様がコータさんの希望した人物に丁度いい人を手配できたって言ってたわ。今日あたり来ているかもしれないわね。どんな人が聞いている？」

話題を変えるためか、お母様がことさら明るい声で話を降って来た。

「知らないわ？ずーっと歳上のメイドと、教養があつて言葉や歴史やマナーと一緒に出来れば魔法も教えられる人でしょ？」

誰かしら？お父様がまっかせなさい！と言っていたからチョット不安…お茶目なのよね、特にこういう話には。

そんな話をしているうちにお城に着いたのでコートタの部屋に早足で向かう。

「コートタ！私よ！入るね。」

扉を開けて中に入ると…女の子がコートタに手を回していて、今にも…

「ダメー！」

「なんどうわーーーーー！」

バシャーン！

コートタを突き飛ばしたら空いていた窓から落ちて…下の池に盛大な水しぶきがあがった。

…ふう、救助成功なの…！

ミルの心配と新しい仲間（２）（前書き）

はじめまして。

新キャラのエ・クレアです。

”エ”はエルフの部族の名前です。

7の大地の海の近くの森に住んでいます。

チャームポイントは緑の髪と瞳かな。

背はミルちゃんより頭一つ分大きいです。

人間でいうと14歳くらいかな。

実年齢は聞かないでね（笑っているけど…目はマジ）
よろしくね。

ミルの心配と新しい仲間（２）

今、池に落とされず濡れになった俺は自室で着替えをして頭をタオルで拭いて乾かしている。暖かい季節が近づいてきているみたいだがまだ風は冷たい。部屋にはアンノルファイ教団の法衣を着た猫耳のミルと、メイド姿のエルフのクレアがいる。

「つたく、イキナリ突き落としゃがって…。」

そう小声でぶつくさ言う俺にミルは小さくなって反省のポーズをとっている…怒りきれない、相手は子供だ。

クレアと密接していたのは魔法による精神感応空間を保つためであるが、どうもミルは女性が近くにいただけで俺が結婚を申し込むと思っているらしい…失敬な。

とにかく一番の懸案であったコミュニケーション不足は今日で解決できた。今はミルやクレアの会話が普通に聞き取れる。

クレアは見た目は１４歳くらいのエルフで王様が今日連れてきた。

俺の要望した全てを満たす人物だと。

ただし俺の要望は「歳上つまりオバちゃんのメイド」と「この世界を知るための先生」を希望したんだが。

メイドは若い女の子に日常生活を色々手伝ってもらうのは恥ずかしいから。この前、１７歳くらいのメイドっ子に着替えを手伝われたときカワイイ！って言われてかなりショックだった…俺は２４歳なんだよ！身体は１０歳だけど（泣）。

クレアは確かに年齢は上みたいんだけど…全然解決になっていない気がする。

あと、この世界のことを知る先生のような人物を希望したんだがメイド兼務とは言っていないんだけどなあ…。

ああっ、細かいことはもういい！

とにかくクレアが精神感応空間魔法…触話に似ていてるけど言葉はそのまま…頭の中で電話するみたいな魔法…を使用して会話の学習をしていたんだがこの魔法、長く続けると単位時間あたりの会話が長くできる。今日は3時間くらい会話の勉強を連続で行ったのだけど、最後の方は1分で10分くらいの量の会話ができた。お陰で会話は聞き取れるし、この世界のこと色々わかった。後何日かこれが続ければ会話に不自由はなくなるだろう。そうすれば次は文字の知識だな！

「本当にミルちゃんは大きくなったわね。この前会った時はこんなに小さかったのに。」

ミルとクレアが世間話しをしているのだが…クレアは独特のクセのある話し方をする。

今の話でクレアは手で大きさを示してみせていたがそれは乳児サイズじゃ…さすがにミルも返事に困っている。

「ともかく、スー君に頼まれたからちゃんとしたエルフに育てるわね。」

「えっと、スー君てお父様のことですか？」

「ええ、前はよく遊んであげたのよ。」

さすがエルフ、長命だな。

とにかく助かる！あらゆる知識を詰め込んでいるらしくあれだけ喋ったのにまだ序の口って言ってた。

魔法も教えてくれるって！てんこ盛りだつて！

「あと…こんな体験はじめてなのよね。」

クレアの視線の先が…に向いている。

おお！
” 第一見える人 ” 発見！

ミルの心配と新しい仲間(3)

クレアにはコレが見えるらしい。

異世界に来てから今日まで俺は多くの人達に会ったがコレが見えた者はいない。

マーフィーやミル、王様、王宮の人達…誰にも見えなかったようだった。

ついでにやっかいなことがある。

「こんな体験で？なに？」

ミルがクレアに問う。

「…えーと、なんの話してましたかしら？」

やっぱりか…。俺はミルの背後に回ってコレを片手で差し、もう片手をムリムリって感じに顔の前で振った。

「あっあー！やっぱりほらっ！写しの世界の住人て会ったことなかったし。」

意図が伝わったらしく、クレアはミルにごまかしの会話をはじめた。
…難儀だよな、コレのことを誰かに伝えようとすると頭が真っ白になるから。

コレ…俺の腹に突き刺さったままの…おっと！強く意識だけで頭真っ白になるしー！

まあ痛くないし、触れることも出来ないから生活に支障は無いし…

協力を期待できそうな人物も見つかったし…後にしよう。
それよりも、

「ミル！神殿行ってきたんだろ。聖幕のカードは？」

「うん！無事にカードメーカーさんの処に着いたみたい、何とか直せそうだって言ってたって。」

カード魔法は心ポケットにいれておけば誰でも即座に魔法を扱うことができる便利なものだ。しかし、扱い方が悪いと破れてしまづらい。

俺は魔法の扱いに素人だったために「触話」の魔法カードをダメにしてしまった。

そして沢山使った「聖幕」のカード2枚も破れる寸前だったようだ。「触話」だけでなく、「聖幕」までを失うわけにはいかない。

魔法カードはカードメーカーという専門の魔法使いが作ったり直したりできる。この国にはレアな「聖幕」のカードを直せるだけの實力あるカードメーカーがいないらしい。

そのために、魔法カード作りが盛んな自由都市国家群のなかのトレカという国に送ってもらって修理中なのだ。

この世界の人間側の勢力範囲内では2つの教会が協力して交易をサポートしているらしい。今回の場合、フィルガード王国とトレカという都市国家はあまり仲良くないらしいのでアンノルフアイ教団を通じて修理してくれるように依頼したらしい。ともかく直るなら嬉しい！

「コータは魔力が底なしだから色々できる魔法があると思うわ、楽しみね。」

うん！カード魔法もいいけど自分で使いたい！
むっちゃ楽しみ！！

1、2ヶ月くらい出かけてくるって言うってたマーフィーが帰って来る前に習得して魔法を見せてやりたいな。

「クレアさん！コータには、まず防御の魔法を教えてください！…友人に言われてますので。」

ミルがいないことをいう…派手なのでいいじゃん！

「クレアでいいわよ。そうね、暴発が心配だから地味なのからにするわね。」

ぶーぶー！

だがその辺は理解しているので不満は言わないぜ、俺は大人だし…ちっ。

「コータの顔ヘン！」

「ミルちゃん、ここは生暖かくスルーしてあげるのよ、顔に出てるけどね。」

…返って凹むから…それ。

マーフィーと3匹の蛇（1）

おとぎばなし風の語りをしてみました。

ここは6の大地です。

時計の盤のような形をしたこの大陸では、6時の1時間分の範囲を「6の大地」と呼びぶのです。

この地は、人間側と魔軍側とが何度も何度も戦いを繰り広げた悲しい土地です。

そのために瘴気と呼ばれる濁った霧のようなもので覆われて生きるものが住まうのに適した場所はごくわずかしありません。

夜には骸骨が歩き回り生きているものを襲います。

相手が人間でも魔族でも関係なく襲いかかります。

そんな土地のあるところに黒髪の男が空から舞い降りてきました。

しばらく歩くとある一点…小さな岩…を見つめてふうつと息を吐きました。

「ようやく見つけたぜ！」

男は急にふわりと跳躍して10mほど後ろに下がりました。

今までいたところの地面が岩の口となってバクッと閉じたためです。

「あつぶないな〜」

言葉とはうらはらにさして驚いた風でもなくその男…マーフィーという名前なのですが…は口笛を吹きながらそうつぶやきました。

石の口はそのまま蛇の頭となって地面に出てきてとぐろを巻きました。

そこにいるのは岩の大蛇です。

「フシュー！さすがは…魔王の肩書きを…持つだけのことは…ある。」

「気配に覚えがあるな。3魔王ケンプの副官ブルートの手下か？」

「そのくらい…わからぬわけでは…あるまい…我は岩蛇と申す…では…参るぞ！」

そう言うのと岩蛇は何かの呪文を唱えました。

するとマーフィーと岩蛇を包み込むようにして岩のドームが出来上がりました。

真つ暗闇になりましたがマーフィーは慌てません。

彼は魔人の中でも影族と呼ばれる部族の出身なのです。

影を自在に操る彼ら影族にとって暗闇は最も安心できる場所なのです。

「星の光よ！」

今の言葉は、魔軍側の共通語…つまり魔法の言葉ではありません。しかし、この空間のすべてが光りはじめました。

「カード魔法か！それにしても…何故知っている！」

「フシュー！ブルート様は…全て…お見通しだ。影族の力は…使えまい。」

そう言うて迫り来る岩蛇から力を失ったマーフィーは地面を走って逃げ回ります。

しかし、この空間に逃げ場所はありません。とうとう追いつかれてとぐろに巻かれてしまいました。

「覚悟！」

大きな蛇の口がマーフィーに迫ります！

ああ、このまま食べられてしまいますのでしょうか？

マーフイーと3匹の蛇(2) (前書き)

また評価を付けていただきました！

本当にありがとうございます。

見に来ていただいて、お気に入りに入れていただけの方も増えて来て、評価も付けてもらって、こう…リアクションをいただけると本当に嬉しいです。

マーフィーと3匹の蛇(2)

岩蛇が自分とマーフィーを包み込むようにして作った岩ドームができています。

暫くしてドームは無くなり元の地面に戻りました。

そこにいるのは岩蛇だけです。

その岩蛇に2匹の蛇が近寄って来ました。

1匹は羽が生えている飛蛇。

もう1匹は息をするたびに炎を口から漏らしている炎蛇です。

岩蛇を倒してマーフィーが出て来たら彼らが相手をする2段構えの作戦でした。

「フシユー！上手くいったようだな！」

「魔王とはいえ攻略法さえ分かっていたれば恐れるほどの相手ではないな！」

「マーフィーさえ…倒せば…この者は…喰らって…いいのだったな。」

そう岩蛇が言う和小岩が割れて中から赤い毛並みをした狼が転がり出して来ました。

身体は岩の縄で縛られています。

「よし飛蛇！報告して来い！」

「フシユー…」

炎蛇に飛蛇は視線を投げかけます。

赤い狼を喰らえば強くなれるからです。

魔族は強い者に従いますが常にその力を狙っているのです。

マーフィーを喰らった岩蛇は強くなっていることでしょう。

この獲物を逃せば飛蛇と2匹とは実力差が大きくなるのです。ですが結局この中で一番弱い飛蛇は諦めて報告に行くことにしました。

同じ蛇族だから他のことで穴埋めする約束を実はもうしているのです。

「さてと、いただくとするか。」

炎蛇は大きな口を開けて赤い狼をひと口に飲み込もうとしました。しかしそのとき岩蛇が巻きついて来て身動きがとれなくなりました。

「フシュー！ずるいぞ！こいつまで喰らう気か！」

炎蛇の問いに答えぬまま岩蛇は締め付けを強くします。

しかたなく炎蛇は炎そのものになる自身のスキルを使い戒めを逃れました。

が、その炎をバクバクつと喰らうものがいたのです！

いつの間にか戒めをとかれた赤い狼でした。

炎狼というこのものは炎が大好物なのです。

「ガフシュー！」

食べられて小さくなった炎から元の蛇に戻った炎蛇は変身が解けて人型に戻ってしまいました。

地面に両手を付いて荒い息をしています。

その横に岩蛇も転がり人型に戻ります。

こちらも苦しそうにしています。

その岩の蛇だった男の口から黒い影が出て来ました。

そう魔王マーフィーが中から岩蛇を操っていたのです。

「すま…ん。無念…」

「ぜえっ…ちつ、そういうことか！ブルート様の策は失敗したか！」
「並の影族なら通じたさ…相手が悪かったな（危なかったけど…コータの真似しといて正解だったよ）。」

実はマーフィーは空を飛んでいる最中に影と触診のカード魔法を併用してこの辺りを探っていたのです。コータのように複数のモノを探れませんがでしたが3匹がいることを調べていたのです。

3匹のステータスを探り岩蛇だけが闇（魔）属性の魔法カード「星の光」を持っていたのに気がついていました。

魔族はカード魔法に頼るものはほとんどいません。
自分の力が全てだと思っものが多いからです。

マーフィーは影族の自分への対策が立てられていることに気がつきました。

わかってさえいれば対処方法はいくらでもあるのです。

例えばとぐろに巻きつかればそこに影が生まれます。

大蛇の大口の中にも影が生まれます。

「テス…久しぶりだな、相変わらず美しい。」

赤い狼は真っ赤な髪をしたグラマーな女性の姿になっていました。

「こいつらは、私が喰らう。」

やはりこの女性も魔族のようです。

マーフィーと3匹の蛇(3)

魔王マーフィーと大魔王シェリーの副官で炎狼の美女テス、そして魔人の蛇族の男が2人そこにいました。

蛇族の2人はもう観念したのか大の字になって目を閉じています。テスはこの者達を喰らう気にいるのです。

「こいつらに聞きたいことがある。おい、シェリーについて教えるよ！」

「ふん！知らねーよ。」

「我が大嘘を吐く前に殺すがいい。」

「無駄だ。喰らう。…む？」

そう言うて前に出ようとしたテスの身体は動きません。影で縛られているからです。

「何の真似だ？」

「チョットは落ち着けよ、そんなんじゃ嫁のもらいてがなくなるぜ！まっいざとなったら俺がもらってやってもいいケド(笑)。」

「マーフィー？」

テスには不可解でした。以前のマーフィーはシェリーに夢中で他の女には目もくれませんでした。美しさでは大魔王にも負けないと自負するテスの誘惑にも全く靡くことがありませんでした。

「おい、お前ら俺のところで働かないか？面白いものを見せてやるぜ！」

「我は断る！命押しさに裏切ったと思われるのは心外。…だが、我が命でこの者の命を救っては下さらぬか？」

「おい！岩蛇！おめーカッコつけてんじゃねえぞ！俺を殺せ！こい

つには仮があるんだ！」

「裏切りじゃ無ければいいんだよナ…」

にやりと笑ったマーフィーを見てテスはゾクゾクしてしまいました。シェリーでさえも知らない昔のマーフィーの顔だったからです。

「2人とも身体をよつく調べてみるよ、面白くないモノが付いてたぜ？」

炎蛇は手で体をまさぐりました。

岩蛇は目を閉じて鼻をヒクヒクさせました、蛇族は鼻がきくのです。やがて髪の毛の中から小さな丸いものを摘み出しました。

「ブルート様の…毒卵。」

「俺にも…。」

「ブルート様は策士だ…我等が喰われるのをみこされて…とうに見捨てられていたか。」

「どーするー？」

「炎蛇よ…飛び蛇に追いつくか？」

「ああ。おい！行かせてくれるか？」

「決まりだな！じゃ2匹とも俺とコータの部下ってことで…ああっ3匹か？」

「マーフィー殿にこの岩蛇、忠誠を誓う。コータ殿とは？」

「そのうち話すさ。炎蛇は行きな！」

炎蛇は炎の翼を作って飛んでいった。

「あいつらが戻りしだい、とんズラだ。」

「お前…本当にマーフィーか？」

「ケツケツケツ…テス…お前の目にはどう映る。」

「昔の…魔王になる前のお前に見える。」

「ははは、でも今の方が魔王らしくない？」

「…らしくない。魔王ならあらゆるモノを喰らい強くなるべきであ
ろっ…シェリーのように。」

「うーん、たぶんそれだと俺とコータの趣味に合わないんだよねー。

うん、つまらん！」

「シェリーを嫌いになったのか？」

「

「いんや…ただあいつにこだわらなくなったのは確かだ。」

テスは知っているのです。

シェリーが彼にとつての”全て”と言える存在になってしまってい
たことを。

そんな彼のために…彼の近くにいるために…テスは大魔王の副官を
することにしたのです。

マーフィーは”過去”を乗り越えたように彼女には見えました。

「ふん！マーフィー…お前の面白いモノとやらがなんなのか、私も
見せてもらおう。」

つん！と言っではみたものの、彼女は狼の姿でないことに内心ホッ
としていました。勝手にシッポが大きくふれるのを今の彼女は止め
られる自信がありませんでしたから…。

この日マーフィーは大切な友達を助けて、敵だった3匹の蛇を家来
にしました。

マールフィーと3匹の蛇（3）（後書き）

今回の書き方はどうでしたでしょうか？

おとぎ話風を意識した語りでしたので少し子供っぽく感じた方もいたのではないのでしょうか？

作者は色々な語りで作者が飽きないように楽しんでいるつもりです。皆さんも楽しんでいただけると幸いです。

魔法実験を兼ねてのピクニック（1）

カタンコトン…夏が近づいて来ていることを知らせるような日差しの中を2頭だての馬車が走る。

馬車の中に乗っているのは俺とファイガード王国第2王女であり女神アンノルファイに愛でられた存在であることを示す猫耳をしているミル、エルフで俺の先生兼メイドのクレア、俺の「写し」である4魔王マーフィーの4人だ。

後、別に1騎…女騎士が付いてきている…第1王女のサーラ姫だ。クレアが俺の元に来てから1ヶ月あまり、その間に魔法の基礎は納めた。

カード魔法はバッチリOKだ！俺はカード魔法が発動してから”扱う”ことに関してはマスターしていたに近いらしかった。ただ、発動させるのに必要な魔力を絞れていなかったようだ。例えるなら空気のいれすぎで自転車のタイヤをパンクさせるような感じ。

クレアに複数のカードを心ポケットに入れて魔法を扱えることを見せるとびっくりしていた。やはりこれが出る者はいないようだ、クククツ。ちなみに「聖幕」の魔法カードも修理されて戻って来たぜ！

今日は俺の詠唱魔法の実験のため王族の別荘地に向かっている。

俺は魔力の量が底なしのようで間違っても王城の中で魔法を暴発させないために、という配慮である。

ただ、クレアが「ピクニックみたいですね、お弁当でも作りましょう。」なんて言ったため、ミルが「ミルも作るのー！」てことになり昨日は大変だったらしい。タベの食事の品目が少なくてコックさん達が王様に謝っていたが…たぶん原因はミルだろう、何が起こったのか怖くて聞けなかったが…王様はノープロブレムって言うてた。本当にフランクな王様だよな。

今の車内の配置は進行方向に背を向ける形でクレアとマーフィー、

進行方向を向いて俺とミルが並んで座っている。マールフィーは今朝帰って来たばかりだ。みんなで情報交換をすることになった。

魔法実験を兼ねてのピクニック（2）（前書き）

お気に入りに入れてくれる人が増えてきました、本当にありがとうございます。

PVアクセスも1万を突破しました。

これからも楽しみながら楽しんでもらえる作品を作りたいと思います。

魔法実験を兼ねてのピクニック(2)

今、みんなで情報交換会の真っ最中です。

「…てなワケで魔軍側は混沌としているよ、3魔王んトコ以外。」

「うーん、こつちも聞いた限りでは人間側も身動きがとれないよな。」

「そうみたい、お父様も困っていたの！お姉さまもよく王都近くに現れたモンスターを倒しに行っているの。」

「うちの部族は大丈夫だけど、他のエルフの部族は大丈夫かしら」
「？」

マーフイーの報告と俺達がかつちで集めた情報を整理すると今回のこと、つまり大魔王シェリーがいなくなったことで大きく情勢が変わってしまったことがわかる。

変化する前の情勢は以下の通り。ちなみにここの大地は時計の盤のようなかたちだ。

魔軍側

2魔王：12、1の大地

1魔王：2の大地

大魔王：3、4の大地

3魔王：5、6の大地

(12と6は戦場、大魔王と3魔王は共同戦線を貼っている)

人間側

ファイガード王国：7、8の大地

都市国家群ビツクチャイルド：9の大地

カタカタ帝国：10、11の大地

変化後：

まず3456の大地を手に入れたことになる3魔王が6の大地をフアイガードに譲った。これにより危険な6の大地の管理と、停戦時に魔軍が放ったモンスター達が7の大地を脅かしていたことでフアイガード王国が動けなくなった。

次に3魔王はシェリーの直轄地だった3の大地を放棄した。そのためここに隣の2の大地を支配している1魔王が攻め込んでいる。3の大地の者は抵抗しているらしい。

同じころ、人間側の帝国カタカタと戦争をしていた2魔王は停戦の和議を申し込んだが、双方の都で相手方の勢力と思われる集団によるテロが起こり停戦どころではなくなっている。

また、9の大地にある都市国家群ビクチャイルドの中でも都市国家間で争いごとが起こって不安定な情勢になっている。

「ほぼコータの指摘どおりだな。仕組まれている！タイミングが良すぎる！ケツ！」

「でも、これは防ぎようがないですねえ。」

「うちの国だけでも何とかしたいの！。コータ！何とかなんないの？」

「…なあ、マーフイー。明らかに時間稼ぎって感じがするんだが、3魔王の狙いはなんだろう？」

「あるとすれば、5年後の魔王会議だ。魔軍側では最高意思決定機関になる。…大魔王が誰かもこれで決まる。」

「多数決とかですか？」

「んなわけないだろ（笑）。力ずくさ！魔王以上の称号を持っていないと出席出来ないんだぜ！」

「それじゃマーフイーは出席できるのね。みんなに仲良くしようって言えないの？」

「一応出席はできるけどな、それは言いたくないセリフだぜ（笑）。魔王の沽券に関わる。」

「そこをなんとかするの！コータの写しでしょう！-」

「ミル、やめとけ。言ってきく様な奴らじゃ無いだろう…それを言うならゆつことを聞かなければならない”状態”を作っておくべきだ。」

「どうする気…。何か企んでるわね…。2人とも同じ顔しているわよ。」

「ケツケツケツ！手駒も増えたし…仕込みは始めてきたけどな。」

「今は言えるような段階ではないから。」

「教えて欲しいの！」

「ミルも俺の力になって欲しい！時期が来たら必ず教えるから今は待つて欲しい、なっ！」

「う、うん（*・・・*）」

「難しい話はもうよしませう。今日はせつかくのピクニックなんだし。」

…違っだろ、ティーチャー！

魔法実験を兼ねてのピクニック(3)

王族の別荘地に到着したのはお昼のチョット前だった。

先に来ていた人たちがベンチとか椅子とか組んでくれている。このあたりはさすがはロイヤル！ってな感じだな。

クレアとミルの作ったお弁当…こんなはどうすんだろ…を降ろしていると、サーラ姫がお昼の前に身体を動かしたいと言って来た。

どうやら、ずっと前からマーフィーと戦いたかったらしい。マーフィーも承諾し主に武器での試合をやるうということになった。これにミルが自分もー！と言って来たので3者三つ巴戦！ってことになった。

もちろん俺とクレアはお茶会…もとい観戦である。

サーラ王女は王国でもトップクラスの實力を持っている戦士だと伺っていた。練習はを見せてもらったことはあるが魔王相手にどこまで通用するか見ものだ。

片手剣と丸盾、全身鎧…但し所々露出あり…といういでたちだ。マーフィーとミルは軽装である。武器は持っていない。

まず、サーラ王女が動いた！

フェイントを織り交ぜながら剣を突き出す…様子見と言ったトコか。マーフィーはそれをゆらりゆらりとかわす。

ミルが横合いから爪攻撃を仕掛けるが影が膨らんで相手をする…どうみても猫じゃらしだよな、アレ。

いきなり王女が後方に飛んだ…いつの間にかマーフィーは双剣を握っていて突き出ている。攻守交代とばかりにマーフィーが双剣を振るいサーラ王女を追い立てる。サーラ王女は慎重に盾と剣でさばきながら反撃の機会をうかがっている。

ミルの攻撃…あのドリルアタックをピョンとマーフィーが弾いた瞬間サーラ王女がマーフィーを切り裂いていた…と思ったらマーフィ

ーが2体になった。

それぞれが1本の剣を持って左右から挟撃を開始する。あつ、なんかサーラ王女嬉しそう…少し開いた口元から犬歯が口から出てて…チョット怖い。

「やはり、私が戦った大魔王はお前か！」

「あたりー！本物とやってたら死んでるぜー！」

そういえばサーラ王女は何度か大魔王と戦ったことがあるって言うてたっけ。影武者のマーフィーが相手をしてたってワケだ。

サーラ王女のスピードが増す！2人のマーフィーも！

この距離で見えない！ミルも見失ってオロオロしている。

ピタツと止まった3人が見えた。1体のマーフィーが剣をサーラ王女に突きつけ、もう1体はサーラ王女に剣を突きつけられていた。

「このくらいにしようぜー！ケツケツケ。」

「…そうだな、本気になりそうだし。付き合ってくれて感謝する。」

そう言い合って剣を納めて戻ってきた。

ほっぺたを膨らませたミルも。

「お疲れ、凄かったよ。」

「ミルも頑張ったわね。」

「慰めはいらないのー。」

「そんなことない、この経験は貴重だと思うよ。」

「コータがそういうなら、うん？」

「じゃあ、昼メシにしよう！」

ということ、お弁当を広げたんだが…

「オレ、チヨット散歩してくる。腹減ってないしー。」
「わ、私も付き合おう！」

…マーフイーとサーラ王女が逃げやがった。

ミルの作ったお弁当は…ナゼ…黒いものしかないのか？

クレアの作ったお弁当は…色合いは美味しそうなんだが…砂糖漬けとか蜂蜜漬けとか激甘…。

視覚的にも嗅覚的にも刺激的な…三步ほど引いてしまった。

2人とも魅力的な笑顔で…絶対に俺が喜んで食べると疑わない顔で…俺を見ている。

ぐっ！レディに恥をかかせてはいけない…ここからは俺の戦いが始まるようだ。

「いただき…ます。」

「「召し上がれ！」」

…この日、俺の好物が変わったことを知る人は少ない。

魔法実験を兼ねてのピクニック(4)

なんのためにきたか忘れかけてい

たが、ようやく俺の魔法実験を始めることになった。

えっ、お昼ご飯はどうだったかって？

もちろん美味しかったさ！

ミルの黒ご飯の香ばしい歯ごたえ！

クレアのパスタサンドのまったりとした甘味！

どっちも絶っ品だった！

…もう昔の俺に戻れないのサ。

いつの間にかお昼を随分まわってしまっていた。

今回の魔法は俺の希望をクレアに相談したところ、詠唱魔法の「天視」というものにした。

離れたところを視ることが出来るノーマル系の魔法で、地味だが使える魔法だ。

教えてくれたクレアには「悪いコトに使ったらトンデモナイ呪いをかけてあげる？」って言われている…ブルブル(怖)。あつ、悪用は禁止だ！

「じゃあ始めましょう。魔力を紡いで。」

クレアの指導を受けて静かに魔力を紡ぐ。

ここでのポイントは魔力量の調節だ。

俺は多く出しすぎる癖がある…よし、これでどうだ。

「いいわよ。次は練って。」

練るといふのは紡いだ魔力を”使う術”に変換する準備のようなものだ。

これは意識上の問題のようなのでうまくイメージ出来ないことが多いのだが…こんなんでどうでしょう？

「うゝん落第すれすねゝ次はもつと頑張つてねゝ。とりあえずそれで行きましようゝ真音のリハーサルゝ。」

「【天より…観る】」

「【観る】よゝ！」

魔法の核となる真音は発音とイメージがチョットでもズレると違うものになる…これが1番難しい。

実はここでズルをしている。

真音は”手に入れる”あることをしなくてはならないらしい。

詳しくは教えてもらってないが普通だと真音の【天】と【視】は手に入れるのが難しいらしい。

特に【天】は手に入れるのが非常に困難だと言っていた。

今回にエルフのクレアに手に入れてもらって”譲って”もらったのだ。譲ることが出来る魔法使いは少ないらしい。ミルはズル過ぎるのゝとか言っていたが多少のことは見逃して欲しい。

目標が大っきいんだから時間短縮出来るものはしたいんだよね。

「【天より視る】」

「いいわゝ今度は魔力を込めてゝ少しづつゆっくりねゝ。」

「【天より視る】！」

リハーサルまでは行ったことがあったが、魔力を込めたのは初めてだ。

うまくいけば真音によって魔力は術に変換される…ここで精神を乱すと魔力が霧散して失敗してしまう…慎重に！慎重に！

すると魔力が変換されて半透明の球体がぽんっ！と目の前に現れた……いやったあ！成功だ！

頭の中に映像が浮かび上がる……視点は下向き、今は地面と自分のつま先が見える。

「なんとか成功みたいね……。制御は大丈夫？」

「大丈夫。」

魔力を紡ぐのを忘れないようにしながら球体をコントロールする。動かせるけどピーキーだな……右に動かした……ややっ！一気に動き過ぎる！

「ぶつけると壊れるわよ……上に動かして……！」

右に動かしたら思っていたより随分速く動いた。危ない！木にぶつかる！上だ！上！

上にあがった……おお、魔力が結構必要で距離に比例して消耗していく……まあ俺は魔力量チートなのでこの辺りは全然気にならないが……それはいいんだが……。

うーん、これは……大陸が……星が見える……はは……は。

……上がり過ぎたね。

ブルートの怒り（１）（前書き）

読んでいただける皆様へ

作者の考えですがこの物語は読み時間１００分～１２０分を目安に
１編（１巻？）とする気でいます。

ですのでこの話で１区切り…つまり１編の山場にする予定です。

精一杯頑張ります。

宜しければお付き合いくださいね。

ブルートの怒り（１）

ブルートが語ります。

現在、３魔王の魔王城では本来魔王ケンプ様が座る玉座に副官ブルート……つまり私が座っている。ケンプ様は今動けない状態なので私が全てを指揮しているからだ。

座っているというのは表現としてどうかと思うが私がそう思うのだからいいであろう。氷の蛇の姿をしている今は玉座に巻きついて、というのが表現として正しいとしても。

今日も世界を監視することを忘れない……私は完璧主義なのだ。

「恐れながら報告申し上げます。先日、６の大地に赴任したファイガードの貴族は毎夜現れる骸骨どもに恐れをなして一昨日撤退いたしました。」

「よろしい。」

これですでに２人目だ。ファイガード王国は明け渡した６の大地を管理するのに手こずっている。骸骨どもを駆逐するには正規の軍隊とアンノルファイ教団の力が必要であろう。そうすれば王の直轄地となる算段が強い。そんなことは戦役の褒賞を得たい貴族達が許さない。かといって骸骨どもと戦う戦力を有するだけの貴族は少なかったとしてもわざわざこんな危険な土地を欲しがるほどバカではない。

「報告申し上げます。３の大地の者達はテスが帰還したこともありまとまってきております。しぶとく１魔王の兵を受け返しております。」

「ふふふつ、怪我の功名だな……その方らの不甲斐なさのせいで逃げ

られたと思ったら我らの盾になってくれるとは。だがこれで失敗が帳消しになったとは思わないことだ。」

「わかっております。蛇族の長よ。」

報告にきた岩蛇は先日大きな失敗をした。しかし駒としては使える方なので切り捨てるはしばらく先にした。そのために今は同じく失敗した炎蛇、飛蛇と共に一兵卒に降格させ使い走りをさせている。いい報告が入ってきたので気分がいい。少し自室で休むことにした。

ブルートの怒り（２）

自分の部屋に戻ったブルートは変身を解いて鏡の前に立った。
私が一番好きなものは自分の美しい姿なのである…いつみてもウツトリする。

しかも、この鏡はただの鏡ではない。蛇族の代々の長がその氷の力をつぎ込んで作り上げた魔法の鏡なのである。

もし、この鏡に世界で一番美しい者を写すように言えばその姿を写し出す…それではト・ウ・ゼ・ン！私が映るだけなのでつまらない。

「鏡よ鏡、世界で一番恐ろしい人物は誰だ？」

この問いに対して…私の奸計により大魔王シエリーを捕まえたときから…世界中に火種を撒き散らして争いを耐えないように画策し実行したときから…鏡は私を写すようになった。

そう、私は世界で一番美しく、恐ろしい存在となったのだ！

１ヶ月ぶりに鏡に問いを投げかけたのだが映るのは当然わた…

な・ん・だ・と…！

私は部屋の中にある数体の像のうち、人型の一体に歩み寄った。

「起きろ！」

この者にかけた氷の呪いの半分を溶かした…そうこれは像ではなく氷の呪いで氷漬けにした者達だ。

上半身だけ氷が溶けてその者はゆっくり目を開けた。

「…まだワシは生きておったのか？」

「人間の呪術師…いや呪士よ…あの鏡に映った者を呪い殺せ！できたら開放してやろう。」

「…ふん、呪いを知らぬ身ではあるまいに！姿だけでも呪いはかけられるが…殺すまでは無理であろうて。」

「…これを使うがいい。これで出来ないとは言わさぬぞ。」

「こつ、黒竜の怨念！」

私が手に持ったカードを見て人間の呪士…呪いを使って相対する者を葬る魔法使い…は声をあげた。

やはり知っていたか…カード魔法の中でもレア中のレアカードのこれを。

このカードは危険すぎるので自分で使うわけにはいかない…そのためにこの呪士を生かして置いたのだ。

呪士にかけた氷の呪いを溶かす…呪い解くわけではない。

「3日以内に結果を出して戻れ。さもなければ氷の呪いがまた発動するぞ。」

呪士を追い出すと鏡の中の人物を睨みつける…生きて私から逃げられると思うなよ…！！

姫巫女とのデート（1）（前書き）

今回から場面がたくさんクロスします。
読みづらかったらごめんなさい。

姫巫女とのデート（1）

コータが語ります。

写しの世界から俺がこの世界にきてから3ヶ月ほど経ったある日のこと。

夏を迎えて大分暑くなってきたところに、俺はようやく2つめの魔法が使えるようになった。

「幕」というノーマル系の詠唱魔法でマントにしたりカツパ替わりにしたりなど応用は効きやすい反面、強度が弱く防御魔法としてはほとんど訳に立たない入門者用の魔法だ。

俺はカード魔法の「聖幕」を自在に扱えるので詠唱魔法でも似た「幕」の魔法は練習にはちょうど良いのではないかとクレアが勧めたから覚えることにしたのだ。

最初に覚えた詠唱魔法の「天視」はクレアに最も大事な真音を譲ってもらったが、今回は「幕」の真音を俺が自分で捕えた。

1から10まで自分で仕上げたこの詠唱魔法を俺はとても気に入っちゃった？

先生のクレアにも内緒で隠れて練習したほどだ。

クレアは魔法以外にもいろいろ教えてくれるがなんといっても魔法が一番オモシロイ！

普通の文字の習得が少し遅れ気味なのはしょうがないだろう、うん。この魔法で今日はあることをしようと思っている。

「ミル！チョット出かけてもいいか？」

「何処に？マーフイーも出かけちゃったんでしょ？」

「ああ…ちよっと魔法の練習だよ。夕飯までには帰ってこれるからさ…」

「ミルも行くの！」

「いや、だからさ。」

「いくの！いくの！連れてって欲しいの！」

「話聞けつて。出掛けるからミルも一緒にこないかって…誘おうとしてたんだよ！」

俺としては最近クリアと魔法の勉強ばかりしていてミルという時間が少なかったの…ちよつとデートに誘ったのである。

「コータの方から…誘ってくれたの？もしかしてデート？」

「んっ…まー…そうなるんじゃない？」

10歳の子供をデートに誘うのはちよつと恥ずかしいがこつちも見た目10歳だし！。

ミルは断らないだろう…たぶん。

横目で様子を伺っているとミルが顔を赤くして…なにか…不思議な踊りを踊り始めていた。

「でえとおん？」

喜んでくれてるんだよね？

岩蛇と老人の会話

呪士の老人と魔人の岩蛇の会話です。

「いやあ、岩蛇殿…かたじけない。」

「気にされるなご老人…我の勤めの一環だ。」

「いやいや謙遜なされるな！この老いぼれがこの城で生きておられるのはまさに岩蛇殿達のおかげですじゃ。…残念なのはお礼をする間もなくお別れをしなくてはいけぬことじゃ…ブルートはワシを生かしておくまいて。成功しようとしまいと。おお…お主らの上役を悪く言つてすまんのだ。」

「ご老人が気にすることではなからう…誰かを呪い殺す仕事であつたな。食べ物の他に必要なものは？」

「これほどの人材…おいしいのう。普通なら色々用意が必要なんじやが、今回は恐ろしいカードを用意されておる…この身体だけで十分なんじやよ。それより岩蛇殿、この後ワシが呪いを始めたらこの城を離れなされ。万が一、呪いを返された場合ここは恐ろしいことになる。万が一のことじゃが…離れなされ。」

「相手の心は強いのか？」

「…さあて、人とも魔人ともよくわからぬ…黒髪の子供じゃ。ブルートがわざわざこんなことをさせる以上、普通の相手ではあるまいて。…重ねて言う。万が一のことじゃが離れなされ。」

「…心しておこう。ご老人に心配をかけさせるわけにもいかぬ。」

「おお、すまんのう。…達者でな。」

姫巫女とのデート(2)

コータの語りです。

ミルをデートに誘ってでかけることにしたがクレアはついてこない。俺はある魔法のことで魔法の先生のクレアに相談したらそれは上級者でないと難しいわ〜と言われてしまった。

まあ、別に自分で使えなくてもよかったのでクレアに使えるようになってくれるように頼んだら、開発と習得に半月くらいかかるっていた。

なので今日のクレアは魔法を開発するため部屋にこもりきりなのである。

ただし、お守り〜とかいってペンダントを渡された。魔除けの力があるらしい。ミルには見られないように服の下につけた。

デートに誘ったミルと2人でお城を出て近くの公園に向かう。

誘った後、ミルは急いで街用の服に着替えた。おめかししているよりもより可愛い。

しかも伊達メガネを掛けたりして変装をしているつもりのようなが…猫耳でバレバレである。

護衛さん達もさりげなくついてくる。

あれ？グレンの親父さんだ…王様に命令でもされたのかな、可哀想に。

グレンさんは王様の従兄弟で俺の保護者を引き受けてくれた心の広い人だ。

公園に向かう途中、露天のお店で腕輪を買ってあげた。あらかじめ調べておいた品物で値段分のお金も用意していたが、ミルへの買物だとわかれると99%offになった。恥ずかしいのをガマンしてク

レアにおこずかいを無心したのに意味が…。

こんな安いものでもミルはとても喜んでくれた。ミルはこんなのもりずつつと高くて綺麗な装飾品をいくつも持っているのに…案外庶民派なんだな。

公園に着くと目的の開けた場所はすいていた。暑いこの時間帯は直射日光の当たる場所を人は避けるので空いてくる…なのでちょうどいい。

「ミル、ちょっと見ててくれ。」

詠唱魔法「幕」を使う。

魔力を紡ぎ、練り、リハーサルをして、魔力を込める…

「【幕】よ!」

「すごいー。こんな短時間で発動できるなんてー。」

それでも詠唱魔法の不得意なミルよりかなり長い時間がかかるんだけど…。

俺は「幕」をある形に変形していく。「幕」は「聖幕」と同様に非常に柔軟に形を変えられる、硬さや色も。

「これでどうだ!」

「・・・?これなに?」

ミルにはわからないだろう。

これは「聖幕」でもできるのだが、今の実力でみんなの前で2つの魔法を併用するにはカード魔法1つ、詠唱魔法1つにしくはない。詠唱魔法2つ同時行使は上級の技術だそうだ。

俺がカード魔法を複数併用できることを秘密にするための策だ。

「ミルこっちにきて乗って。俺のすぐ後ろに。」

「うん…これ乗り物？」

「ふふふっ、いくよ！カード魔法「風」！」

「ひゃー！走ってるのー！」

「2枚：4枚：6枚：8枚：10枚！よし、浮いた！」

「すごいのー！飛んでるのー！」

詠唱魔法「幕」で形を作り、カード魔法「風」10枚を出力とする
…同じ種類なら併用はばれないので。

魔法飛行機に乗っていざ大空へ！
護衛の皆さんごめんねー。

姫巫女とのデート(2) (後書き)

実は魔法飛行機の形のイメージが浮かびません。
どんなのがいいと思います？

クレアにまかせなさい（前書き）

評価をまた頂きました。ありがとうございます。

お気に入りに入れてくれた方も本当にありがとうございます。

昨日は設定ミスで2つ投稿してしまいました。

まあ、あわてん坊のサンタクロースだと思って大目に見てくださいね。

クレアにまかせなさい」

クレアのおしゃべりに付き合ってね」。

首にかけているペンダントがピクンと震えた。見ると普段は緑色の宝石が赤く点滅している。

「あらあら、いけない子がいるみたいねえ」。

さすがに近くを離れたのは失敗だったかしら？

2人に気を使ってあげたつもりだっただけのだけど」。

ボタンと音がして扉が開いた。スー君だ。国王をやってるこの子がノックも忘れるなんて、よほど焦っているのかしら」。

あら？後ろからメリッサ王妃もついて来てる？

「ク、クレア姉ちゃん！コートがミルを連れて飛んで行ってしまった！護衛の者達はとも追いつけなくて！ミルを探してくれ！」

「スー君、2人のデートをつけちゃダメって言うて置いたでしょ。あとでお仕置きよ」メツ？」

スー君は顔を真っ青にして平謝りしてきた。子供のころに少し教育しすぎたかしら」。

「それより庭の植物園に神官と宮廷魔術師を全員呼んで。」呪い返し」をするわ」。狙われているのはコートだけどそばにいるミルにも被害が出るわよ」。

「なんと！わ、わかった直ぐ行かせる！」

来たときより急いで帰る。王妃メリッサ…この国にいるもう一人の
姫巫女が近寄ってきた。

にこやかな笑顔でまっすぐペンダントを見ている。
そして手を差し出してきた。

「そのペンダントは私が預かりましょう。」

「これは…守護石ですわよね？」

守護石はペアとなっている…片方をもっている相手の災害を引受け
る効果がある。

その災害を引き受けている間は赤く点滅するのよね。

「コータさんを護るために片割れを渡されているんですね。返しの
術の行使に影響がおりでしょう。私が預かるように…女神のお告
げがありました。」

あらあら、大きい姫巫女ちゃんはスー君より度胸があるわね。

「いいのかしら…？たぶん「黒竜の怨念」よ。」

知らぬ者がいない恐怖のカードの名を聞いても王妃がにこやかに微
笑んだままだった。

「ミルをもう一度失うことに比べれば…平氣の平左衛門ですわ。」
「ん、ではお願いするわね。」

んふふ

じゃあ…久しぶりに本氣を出させてもらっわ。

100年ぶりくらいかしら？
エ・クレアにすべて任せてね？

姫巫女とのデート（3）

コータの語りです。

「幕」の詠唱呪文でボディーを作った。

「風」のカード魔法をエンジンとした。

今、俺の作った魔法飛行機でミルと2人…空を飛んでいる。

後ろにミルがバイクの2人乗りみたいに寄り添って乗っているかたちだ。

2人で、

城を見たり、

街を見たり、

山を越えたり、

雲に突っ込んだり（むちゃくちゃ寒かった）、

本当に楽しい♪

「コータ！海が見えて来たのー。」

「おースゲー！綺麗だなー。」

美しい砂浜がみえる。

綺麗な青い海に出てすぐのところを旋回する。

「コータ…ありがとう。」

背中にミルがほっぺを押し付けて来た。

「コータがいなければ私…何も知らなかったの…こんなに感動しなかったの…。」

「…ミルが海を見たくなったら、またいつでも連れて来てやるよ。おお、海に何かいるぞ！」

ミルが泣きそうな雰囲気だったので気分を変えさせようとまわりを見て話題を探していたら海に何か見えた。
なんだろう？デカイ！

「魚かなー？」

「にしてもでかいなー50mくらいあるんじゃないか。」

見ていると、大きな魚は水面に頭を出し、顔をこちらに向けて来た。
そして…

「ウハハハハハ！面白い顔になったぞ！ほっぺた膨らませてやがんの！」

「顔だけタコになったの…えっ？」

物凄い勢いで水を吹き出して来た！
そーかー、それで膨らんでたんだー。

クレア困っちゃう

またクレアのおしゃべりに付き合ってくれるのゝありがと。

このお城には私専用の植物園があるのゝ。

そこには私が持ち込んでお城の人に育ててもらっていた植物があるわあ。

これはねゝスー君達が呪われたとき用の対策なのよ。

王妃を植物園の中央に座らせてからゝ植物達にお願いしたのゝ。

植物達は私のお願いを聞いてくれて王妃のまわりで成長してゝ、模様を描いてゝ、花を咲かせたのよ。

はい、お花の魔方阵完成？

スー君がたくさんの人たちを連れてきたるのが見えるわ。

「はあ、はあ、クレア姉ちゃん…ごほん！エ・クレア殿。言われたように人を集めてきたぞ！」

「ありがとう。スー君の奥さんがこの呪いを引き受けるから私が”呪い返し”をするわね。魔術師はお花の魔方阵の外で「呪破」の魔法を、神官は「浄化」の魔法を使つてね。」

状況を説明したらみんなびっくりしていたが私の指示に従ってくれた。

みんなが配置に着くと空から大きな黒い竜が舞い降りてきたわ。半分透けていて実体感がないわね。

魔方阵の結界に阻まれて動きが止まる。そして魔法使い達の呪文でかき消えたわ。

「やったぞ。」

スー君の歓声が聞こえたわ。

「呪いは返すまで何度でもくるわ。みんな気を抜かないでね。」

さあ！私の番ね。

実はもう呪い返し呪文を唱え続けているのよ。

私の場合、エルフ族特有の唱え方なのね。

まわりからはよく…この唄いながら踊りながらって動きが…ステキ
って言われるのよ。うふふ。

しばらく時間がかかるので、ここで魔法の説明をしてあげるわ。

この世界には神が使っていたとされる魔法文字があるの、これをル
ーンと呼ぶわ。これを繋げて文にしたものが魔法の呪文よ。

でもこのルーンには音がないの。書くことはできても読み上げるこ
とはできないのよね。

音、つまりルーンの読みに相当するのが真音…マオン…なのよね。
真音は世界中に散らばっている。神々の紡いだ愛の言葉のかけらと
も、精霊達の詩とも呼ばれているけどよくわかっていないのよね。
魔法を使うにはその人が、何処かにある真音をどうにかして掴まな
ければならないの。

きちんと魔法を勉強して、その真音の意味を理解していれば掴める
のよ。

そして呪いは魔法の一種なんだけど、簡単にいうと…念…ネン…と
いうものが真音をくるんでいるのよね。念は想いの結晶、そして大
抵の場合方向性…向かう向き…があるの。

今回の場合、コータに向かっているのね。今は守護石のおかげでメリッサちゃんに向かっているのだけど。
私はこの方向を180度逆転させて、呪いを術者に向かわせようとしているのよ。これを呪い返しと言っの。

あらあら、そろそろ準備ができたわ。

次の攻撃のタイミングで返しましょう。

でもおかしいわね。呪いのスピードがセーブされているみたい。返してくれていつているようなものだけど。罠かしら。

まあ、返してから考えましょう。

「いくわー！のろいがえ！」

（ワルイナ…）

「！！」

どこからか来た何かの力が…返しの力を…や、壊さないで！

「うわあああ！」

「ぐうう！」

「アンノルファイ様…ミルを…」

「メリッサあああ！」

力のバランスが崩れて…メリッサが呪いに侵食されていく。
失敗しちゃったわ。どうしましょう？

姫巫女とのデート（４）

コータが語ります。

鉄砲魚…でっかいから大砲魚かな？

真っ直ぐこちらに向かって来る水柱をそのまま受けるわけにはいかない、魔法を聖幕に切り替える。

かたちは球体、当然聖幕は海水なんかでどうにかなるものではない。水に押されて打ち上げられたかたちになる。

「ひゃーひゃー！コータ！」

詠唱魔法「幕」つまり魔法飛行機を消したので、ミルが抱きついて来た。

聖幕の一部を糸にして四方に打ち出して姿勢を安定させる。

と、今度は陸地に向かって落ちていくので太い糸を出して地面に打ちこみ螺旋状にかたちを変化させた。

ビヨーンとスプリングみたいに落下の勢いを吸収させた、我ながらグッジョブ！

「ミル、大丈夫？」

「コータ…」

あれ、少し潤んだ瞳でミルがこっちを見ている。

抱き合っているし…吊り橋効果？

ミルが目を閉じた。

おいおい１０歳だろ、お子様だろ。

しかし、今日の前にいる少女は…猫耳で…可愛くて…間違いなく美

少女だ。

俺も…目を閉じる…そして…

「あつ、クレア。もう伝話の魔法出来たんだ。さすがクレアだね。
…うん、…うん、…うん、…あー大変なことになってい…」
「コータのばあかあー！」

クレアの張り手をつけて頬にもみじが…なぜ？

姫巫女とのデート(4)(後書き)

10歳にさせませんよ(笑)

老人の苦悩（前書き）

31日での話しのヤマ場は終了します。

老人の苦悩

ブルートの部屋でワシは落胆しておる…ふう。

今回の呪いのターゲットは黒髪の少年…今も鏡に映っている…この少年の近くに強い術者の気配を感じていたので呪い返しをして来ることは確実であった。

まさしく見事な手並みの術者によってワシの呪いは返されようとしていたが…その返しの力が霧散したのじゃ。

これほどの術の冴えを見せた術者が失敗したとは思えない…誰かに邪魔でもされたかのう。

こうなればブルートが戻ってこない今のうちに自分で自分に呪いを返すか？

しかし、ブルートに敵対する行動を取るとヤツの氷の呪いが発動する、難儀なことだ。

そんなことを考えているとガチャリと扉が開いた。

やれやれ、ブルートが戻って来たてしまったようだ。

しかも1人ではない、3人の魔人を連れてきている。1人は岩蛇殿じや。

3人はルーンをびっしり書き込んであるマントを着ている。あれは呪いの力を弱めるものじゃな。

この3人を呪いを返されたときの人柱にする気か…性格悪いのう。

「首尾はどうだ？」

「守護石を使われていてのう…時間がかかっておる。」

「ふふ、呪いを返させるつもりであつたのではないか？」

「さて、どうかのう？」

「食えんヤツだ…だがもう時間をかけるな。」

やれやれ。

今日はずっと鏡に映る2人の子供を見ていた…。

久しぶりに若い頃を思いださせてもらった…。

死なせとうない…最後の手を使うかのう。

呪いの黒竜を生み出し、今回は呪いの中心となる真音を込める。

このとき真音で隠しながら自らの魂の一部を切り離し埋め込んで送り出す。

魂の一部を”使い捨て”にする非常に危険な術じゃ。

これで氷の呪いから逃れて、一時的に自由な行動ができるじゃろう。

では、いくとするかのう。

ミルのためなら(1)

コータの定番です！

俺はクレアと連絡を取り合いながら状況を確認する。

俺には呪いがかけられているらしい。

その呪いは「黒竜の怨念」という子供でも知っているくらい有名で危険な呪い。かつて6の大地の半分を一夜にして荒野にかえてしまったという。

俺が首にかけているペンダントは「守護石」とよばれるものでペアの守護石を身につけている人が災いなどを引き受けてくれる品だ。

そのおかげで、呪いはミルの母親のメリッサ王妃に向かった。

そして、メリッサ王妃が呪いにかかってしまった。ただ、相手が直ぐに俺じゃにことを気が付いたらしく影響している呪いは一部だけ。メリッサ王妃は女神アンノルフアイに愛でられている猫耳なので呪いの類に強い抵抗力があるらしいのでまだ大丈夫らしいが…。

もうすぐ俺のところへ呪いがくるらしい。俺とミルは海岸近く。王城からは1時間半くらいかと思う。

(メリッサさんはどう?)

(神殿の方から増援で来てくれた人たちにはこの呪いをなんとかできる力を持つ人はいないのよ。そんなに長く持たないわ、ごめんなさい。)

(くっ…どうすれば助けることができる?)

(せめてミルがここにいれば…姫巫女は祝福を使えるから。姫巫女の祝福は特別だから…。)

(俺の判断ミスだ…ミルに見られないようになって思っただけの服のしたに付けたから…守護石を服の上に見えるようにしておけばもっと早

くに気が付いたんだ！せめて俺が使い方を聞いていればこんなことに……使い方？)

不意に思いついた！カード魔法「触診」で守護石を調べる……深く……深く……うん！もしかするかも？

(クレア！ミルが守護石のペンダントを身につけて自分に祝福をかければメリッサさんに届くんじゃないか？)

(えゝそんなこと考えたこともなかったわゝ。ちょっと待っててゝ。んゝえゝとうゝで、なんとかかなりそうねえゝでも保証は無いわよゝ。ともかく今のところベストな選択よゝ。)

守護石はペアの相手にステータス変化を送るアイテムだ。つまり呪いみたいな悪いことだけではなく、良いことも送れるアイテムなんだ！

ミルはメリッサさんの呪われたことを聞いて泣いていた。

「ミル！君の力が必要だ！」

「え？」

「この守護石をかけて。これはメリッサさんにつながっている。ミルが自分に祝福をかければメリッサさんに届く。今メリッサさんを救うにはこの方法しかない。」

「……でも「黒竜の怨念」なんですよ……自信ないの。もし失敗したら……。」

「ミルは俺のことをいつも信じてくれるよな？だったら俺の言葉を信じる……ミルなら絶対大丈夫だよ！俺は世界で一番ミルを信じているから。」

「……コータがそう言うなら……そう言ってくれるなら……！うん！私はコータを信じるの！」

「それでこそミルだ！」

「わたしも頑張るから…だから…コートも呪いに負けないでほしいの。」

そういうと、ミルは守護石のペンダントを首にかけ、跪いて両手を組み祈り始めた…。

祝福の魔法が発動したのか…ミルの体がオレンジ色に輝き出す！最後に見つめ合ったときのミルの瞳が目に焼き付いている…。

泣いていた…あんな目を俺がさせたのか…。

（いいわ。完全じゃないけど、呪いが蝕んでいる範囲が後退したわ。ミル頑張ってる。）

俺は空を見上げた。そこには黒い大きな何かが近づいて来るのが見えた。

マーフイーもない…

クレアもない…

「黒竜の怨念」に打ち勝つ方法もわからない…

それでも…

ミルを悲しませないためなら…

ミルの笑顔のためなら…

俺は…

ミルのためなら(2)

少し長いです。

俺はミルの「祝福」の魔法の邪魔にならないようにこの場から移動した。

カード魔法「聖幕」の一部をスプリングのように使って高速で移動した。

しかし、空の黒い何かもこちらに向きを変えてくる迫ってくる…逃げ切る切れる相手ではないだろうな。

もつかたちもしつかりわかる…竜だ。

半透明だが全身が黒い。

四本の脚に長い首としっぽ、コウモリのような羽…元の世界では空想上の生き物の姿。

この戦い、ミルのためにも絶対に負けられない！

まずは、「聖幕」と「触診」で作った魔法を「センサータッチ」で調べる。

測定対象：黒竜の怨念（特殊タイプカード魔法「呪い」）

現在の測定対象は真音を含みます、つまり呪いの本体です

属性：闇（魔）

効果：対象1人を呪い殺す、そのときその者が願えば約半径200km内の生命力を奪う追加効果を発動する

呪いの解き方：不明

その他：カード使用者の魔力は使わないが、使用者の命を奪うことがある

追加情報：聖幕の防御効果を上回っています

うーん、聖幕でなんかなるんじゃないかと少し期待してたんだが…。

他のカード魔法で仕掛けるか？

でも威力がたりないか？

とか思っていたら目の前にいきなりの来た！

瞬間移動か？

実体が無いからか？

黒竜は口を開けて…うお！…吸い込まれる！

竜に飲み込まれて俺は意識を失った。

目を覚ますと建物の中にいた。

見覚えがある…ここは…祖父の蔵？

間違いない…入り口に近づくとも鉄格子の先に外が見えた。

見覚えがある庭と実家が見える。

俺は元の世界に戻って来たのか？

ズキン…不意に頭に痛みを感じた…。

ブルブル…身体に寒気を感じた…。

この感覚は…覚えがある…これは…。

あのとき…そう…10歳の頃、俺が弟から電話がかかってときに嬉しくて長電話した後、祖父に「教育」と言われてここに放り込まれたんだっけ…。

祖父は俺が自分の気に入らない行動を取ると「教育」といってここに朝まで閉じ込め放っておかれたっけ。

ここは、思い出したくない場所…

ここは俺が絶望した場所

いや…

俺が祖父母への説得を諦めた場所

そんなことは…

俺が家族みんなで幸せに暮らすことを諦めた場所

諦めたわけじゃ…

諦めた

いい子を演じることをやめなかったのは、家族のためではなく単に自分のためだ

違う…

違う

ここはお前が全ての人を怨みはじめた場所

違う…違うんだ…

違うない！

お前の怨みはこのときから蓄積されて来ている…山ほども高く、海よりも深く

うそだ…

うそをついているのはお前だ

もういっな…

この怨みは今も消えていない

言わないでくれ…

全て本当だ…

そう思っているんだ…

怨んでいるのだ…

お前自身が…

そうだ、お前はしなくてもいい苦勞をさせられた！

しなくてもいい痛い思いもした！

苦しかっただろう！

悔しかっただろう！

もういい！

耐えることはないのだ！

その思いを！

怨みを！

抑えることはないんだ！

俺が力を貸してやろう！

お前を苦しませた全てを葬る力を貸そう！

そうだ！

全てを始末するんだ！

そうすれば、お前は全ての苦痛から開放される！

全てを怨むがいい！

我を受け入れるがいい！

さあ！

俺は…

俺の答えは…

お言葉ですが…黒竜様はドアホウですか？

…今なんて言った？

怨みの対象は写しの世界にいるんだよ！

お前がそこまでいけるかってんだ！

第一、祖父は死んでしまってるんだよ！

だからド・ア・ホ・ウ！だって言ってるんだよ！

この間抜け！

景色が消えた…暗い空間の中で俺の目の前に黒竜がいた。

（愚弄しおって！愚かなヤツめ！）

（へん！俺に世界を怨むことをOKさせるつもりだったんだろ？ムリだぜ！）

（ならばお前を呪い殺すまでだ！）

黒竜が黒い塊になって俺を包み込んだ。

すると全身が冷たくなっていく。

感覚が消えていく。

くっ…こんなヤツにやられてたまるか！

しかし、対処法が全く見つからない！

やばい！

（少年よ！竜の本当の声を聞け！）

（貴様！俺を起こしておいて邪魔する気か！）

本当の声？

なんだ？

誰の声なのか、を気にする余裕はなかった。

ただ、その真意を解くために耳を済ませる…本当の声って…聞こえた！

泣いている！

（どこだ！どこで泣いている！）

（聞こえるの？僕の声が！助けて！）

さつきは漠然と「耳を済ませると」思ったがクレアの授業…「心を真音に集中する感覚」と似てた。

センサータッチも真音がここにあるって言うてた。

ここにある真音は「黒」と「竜」か？

いや、黒は呪いの…念の表現だとして…「竜」か！

そう考えた途端、輝きが見えた！

あった！

（僕も君が見えた！僕を掴んで！）

（させるか！）

身体感覚がほとんどなくなってきた…視界までも奪われた…。

つらい…が…このくらいなんだ…！！

”聖なる槍”に力を注がれたときほどではないぜ！

それにミルが待ってるんだ！

（「竜」俺のところに来い！面白いコトをしよう！楽しませてやる！きつと楽しいぜ！）

（行く！連れてって！）

闇を打ち払い金色に輝く真音が俺に突っ込んできた！
掴んだぜ！

（うぐ…バカな…こんなガキに…）

「竜」の真音を掴むと俺を包んでいたモノが霧散した…呪いを倒したのか？

よく見ると、近くに竜と老人がいた。

（長い間、闇にとらわれていたんだ…本当にありがとう！）

（そういえば、クレアが高位の真音は自我を持ってるって言ってたっけ。）

（うん！貴方もありがとう。）

（ほっほっほっ気にせんでよい。正直、ここまでうまく出来るとは思わなかったわい。お主は呪いの天才のようじゃ。弟子にほしいのう。）

（スルーパス！爺さん！ここは礼をいうところだが先に答えてもらおう！なぜ俺を狙った！）

（お主を狙っているのは3魔王の副官ブルートじゃ。ヤツは魔法の鏡でお前をいつも見ることができる、注意するんじゃぞ！）

（あんだ…）

（ワシの体でヤツの呪いが発動したようじゃ…。猫耳の嬢ちゃんと達者でな。）

老人の姿がふっと消えた。

あ…礼を言っていないじゃなか、俺！

まあブルートのところなら…あの爺さんにもう一度会えるかもな。

（下に降ろすね。）

おお！いつの間にか竜の背中に乗ってるじゃん！
俺の乗った金竜は軽やかに宙を舞いミルの近くに降りるとミルが飛びついてきた。

「ごおおおおだああああ！」

「うわっち！泣くなつて！メリッサさんは？」

「だいじょおぶ！ミルがんばつたよ〜。」

せつかくの美少女が台無しだぜ…。

少女の温もりが自分が今生きていることを実感させてくれる…。

よかった…俺はミルがいたから…。

元の世界で精神の限界を迎えていた俺…。

ミルがここで俺を受け入れてくれていなかったらぜった負けていた…。

俺は上を向きながら…抱いたミルの猫耳をいつまでもいつまでも撫で続けた。

俺はミルのためなら…”生きる”ことができそうだ。

ミルのためなら(2) (後書き)

明日でこの話しは終了です。

この物語が終わるわけではありませんよ。

ひとまずの決着

コータが黒竜に飲み込まれて魔法の鏡にコータが映らなくなった…。黒い闇が映るだけ…。

この部屋は不気味な静寂に包まれている…。

魔王ケンプの副官ブルートの部屋はかなり広い。

今ここにいるのは、ブルートと呪いの術師、蛇族の魔人の岩蛇、炎蛇、飛蛇の5人。

術師の老人は座禅を組んで目をつぶり、ブツブツ呪文をつぶやいていたが…身体が青白く輝き始めた。

老人の身体に氷の結晶が浮かび上がって包み始めた。

これはブルートの呪いか…裏切ると発動するタイプだな。

鏡面がまた映像を映し始めたとき…コータが金竜に乗って空を飛んでいるのが見えた。

ヤッパリスゲー！

俺を楽しませる天才だよな、コータは…。

ケツケツケツ。

「ふふ、見事な”開放”じゃ、呪いを解かれたわい。一言の助言だけで…真の天才じゃ…本当に弟子に…欲しくなったのう…この歳で…初弟子を…取りたいと…思うとは…笑…え…」

そうつぶやきながら崩れ落ちる老人の身体の表面に次々に氷の結晶がいくつも浮き上がる。

その老人を魔人ブルートが冷たい目で見下している。

「役立たずめ…そのまま凍え死ぬがいい！」

ブルートがそう言いはなつて部屋を出て行こうとしたとき、不意に

声をかける者がいた。

「蛇族の族長よ、貴方を見限らせてもらう。」

そう言つて岩蛇は老人にマントをかけた。このマントには呪いを弱める効果があるルーンがびっしり書かれている。

「ご老人、飲むがいい。氷の呪いにはよく効くそうだ。」

「マズイし、からいケドな、ソレ。ケツケツケツ。」

「身の程知らずの愚か者どもめ。」

ブルートが魔力を紡ぎ始めた。

岩蛇達の前に炎蛇が進み出てブルートと対峙する。

炎蛇も魔力を紡ぎはじめる。

それを見てブルートがあざ笑う。

「貴様の炎でどうにかなると思うなよ！」

やがて術が完成し、両者が同時に魔術を放った！

「【氷】【結】【破】！」

「【熱】き【旋】【風】！」

炎と氷の魔術がぶつかり部屋が吹き飛ぶ！

大量の水蒸気が姿を隠す。

その隙に岩蛇と老人を回収する。

…ついでに鏡も。

「馬鹿な…炎蛇ごときがこれ程の…！！貴様ら！テス！マーフィー！

！」

「ケツケツケツ。なつテス！オモロイだろー。」

「先に説明くらいしろ！たくっ！お前は昔からそういうヤツなのだから！」

そう、炎蛇に化けたのはテス。

飛蛇に化けてたのはオレ、マーフィーだ！

3魔王城に潜入させて置いた岩蛇達に、たまたま情報を聞きにきていたんだがコータが狙われているってんで急遽テスを誘って見物させてもらってたわけだ。

今回の件、写しのコータが死んでオレも死ぬかもしれない。

だが、あいつがここで死ぬ様な男だったらオレは…俺達はそこまでだったってコトだ。

まあ信じてたけどな。

「ブルート！この前の借りを返させてもらっ！」

「ふんっ！マーフィーと2人がかりか？」

「わたし1人で十分だ！マーフィー、先に行け！」

「んじゃ、あとよろしく。」

「テスよ…実力の差は教えてやったはずだ！」

ケツケツケツ！

先日シェリーが行方不明になった日、テスはブルートに力勝負で負けたらしい。

あいつ負けず嫌いだからな、これだけ見ていこう。

再度、ブルートとテスが放った炎と氷の魔術がぶつかる。

先程よりはるかに大きな衝撃に今度は3魔王城全体が震えた。

テスはそのままの位置にいる。

ブルートは…押されて下がっている。

「そんな…まさか！…マーフィーから”4”を…”魔王”の力を譲られたのか！」

「私が貴様に手も足も出ないで倒され封印された経緯を聞いてのマーフィーの推理、”3魔王をケンプから譲られている”は当たったであろうだな…。」

「マーフィー！貴様は！…この、この力を！惜しくもないのか！！」
「ケツケツケツ、いらね〜し〜！ケンプのヤツはどうだった？渋ったかい？」

「…。」

「テス…派手にやりな〜。」

後をテスに託して空に飛び立つ。

テスなら1人でも大丈夫。

オレはもう魔王ではない。

だが今なら魔王でもけちらせる気分だぜ！

それに逃げる実力なら元々”世界一”だしー！

…ここ、コータなら突っ込むかな。

それにしても、これだけでもケンプの気配がない。

やはり…2人はここではないか…。

影族の最後の生き残り…。

姫巫女シェリー…生きてるよ。

ひとまずの決着（後書き）

ここまでで1巻（編）終了です。

読んでもらってありがとうございました。

私はできるだけ”むふっ”と笑える要素を盛り込んだライトタッチな作品を心がけております。

また、私はローティーンもターゲットにしているので過激な描写は極力控えています。

ここまでのところで、ぜひ感想をお聞かせくださいますか（ワクワクー！）。

評価も出来れば…ポチッと。

お手数ですがよろしく願います。

次の構想が白紙なので、1ヶ月ほどお休みをもらいたいとおもいます。

2月1日から再開いたします。

最後に再度読んでいただいてのお礼を申し上げます。

それでは、よいお年を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6260y/>

猫耳姫巫女と聖なる槍の担ぎ手と

2011年12月31日07時45分発行